

山村文化

'97-2 *No. 16



山崎町文化協会

地域文化の活動

山崎町文化協会会長 壺 阪 壽



最近地域文化の活動が非常に盛んになって参りました。それには色々な原因があると考えられます。経済的に大変豊かになっている吾が国で、人々が物の豊かさだけでは何か心に満たされるものが無いと感じ始めたのも大きな一つの原因でしょう。

それから又、自分等の住んでいる地域の中で文化的な活動をする事によって、新しい人間関係が創りだされ、交流の輪が広がることを望んだからでもあります。

まだその外にも色々な原因はあると思いますが、いづれにしても各地域に於てこういった活動が活発になることは、それぞれの地域に活力を生じさせ、同時に人々の交流をより豊かにするものであります。

私等の山崎町でも色々な文化活動をされている二十一ものグループが「山崎文化協会」を組織し、それぞれに多様な活動を展開されています。

その活動の幅も非常に広く、美術関係、俳句、短歌、文学或いは伝統芸能に茶華道そして合唱等々多くの分野での活動がなされています。

そういった活動の状況を会員の皆様は勿論多くの町民の方々にも知って戴き、御協力を得る意味で此の小冊子の存在意味は非常に大なるものがあります。そのことを多くの方々が此の小冊子を通じて理解戴くことをお願いし、同時に編集に携わってくださった委員の方々の芳に感謝申し上げますが、"やまさき文化"の一層の進展を念願致します。

目次

地域文化の活動	壺 阪 壽	2
高名	林 沙 鷗	3
短歌「歌杖」	栗山 節子	11
俳句「檜四万本」	稲村 幸子	11
塩 句	秋久 光子	13
アジアへそして世界へ	北川 博敏	15
世界の図書館	柳田 博美	18
乃木將軍の金州城外の作	町 悦子	19
祭のあと	小川 登	19
将棋と右脳	志水 昭彦	19
もうすぐ百回目を迎える観察会	杉元 正輝	20
町民合唱団のこのごろ	井口 武一	20
絵ということ	藤井 七代	21
秋のふれあい文化祭を終えて	福岡 久藏	21
草土千軒	塚田 美紀	22
さつき祭の今後について思う	岸本 正理	22
雑感	金井 信治	23
秋のふれあい文化祭に参加して	藤井 正己	23
随想	井口 定子	24
川戸獅子舞の沿革	中川 博夫	24
日本の健康法	高原 忠雄	25
日本の芸能雑感	尾崎 国昭	25
分相応に	尾崎 正一	26
芸能文化の継承に思う	笹木 弥生	25
踊りとの出会い	伊野 操治	27
事務局便り	助光 梅代	27
編集後記	藤村 清一	28
表紙画／カット／	荒木 俊介	28
表紙題字	福岡 久藏	28
	尾崎 正一	28

高名

山崎文学会
林 沙 鷗

戦国の世では武士が面目をほどこすところといえは戦場であった。彼等は、その戦場で一命をなげうって主のため戦うと同時に哀れにもおのが身の栄達を夢みた。

小牧、長久手の戦いの時のことである。

小牧山に布陣している家康が池田勝入らの軍勢三万余が己が居城岡崎城を攻めるべく秀吉の本陣樂田を出発したことを知ったのは、天正十二年四月七日の夜半のことであった。

一番手に池田勝入、二番手に勝入の智である森武藏守長可、三番手に秀吉配下の堀秀政、殿を総大将の三好秀次とする陣立てであった。

事の起りは、本能寺の変の後、次第に天下統一の夢を実現し始めた秀吉に危惧を感じ始めた信長の次男信雄が、当時なを織田家と同盟関係にあった徳川家康に援けを求めたことに始まる。

明智光秀によって信長と嫡男信忠がそれぞれ、本能寺と二條城に討たれると、当時中国の高松城を水攻めにしていた秀吉は、城主清水宗治の切腹を条件に和を講ずると、直ちに引き返して山崎に光秀を破った。

その後、秀吉は織田家の跡目相続をめぐる清州会議に於いて、信孝（信雄の異母兄弟）を推す織田家の筆頭家老柴田勝家を抑えて、信雄と共に信忠の嫡男三法師をその跡目にすえた。その結果、信孝と組む柴田勝家と信雄と組む秀吉は、次第に対立を深め、遂に天正十一年四月二十四日秀吉の軍勢が北ノ庄に勝家を滅すと、続いて、信雄の軍勢も岐阜城に信孝を攻めてこれを自害させた。

ここに於いて秀吉は、天下統一への夢を大きく踏み出したのである。

しかし、その様に秀吉が勢力を拡大し、大阪に巨大な城を築き、その周辺に諸国の大名を住わすにつれて、信雄は、漸く自分が秀吉に利用されているのではないかと疑

い始めた。

殊に天正十二年正月信雄も含めた諸国の大名に大阪城への新年参賀を求めたことを契機として、二人の間は、一挙に険悪化した。これを案じた池田恒興（のちの勝入）の調停も空しく秀吉の調略に乗った信雄は、己が三人の宿老を秀吉と意を通じたとして、自らの手で城中に誘殺し、秀吉と一戦を交えるべく、徳川家康に援けを求めたのである。

求めに応じた家康は、秀吉と戦うべく三月七日清州に向って居城岡崎城をたつた。

一方、大垣城主池田勝入は、信雄と秀吉の調停に失敗すると、秀吉の誘いに応じ、尾州北方に位置する要衝犬山城を城代の不在を幸いに調略によって攻め落とし続いて勝入の婿である金山城主森長可も犬山城の南西三十町ばかり離れた羽黒村八幡林の古屋敷に柵をめぐらして布陣し、家康、信雄連合軍に挑戦した。

家康、信雄の軍勢が小牧に布陣したことを知った勝入は、ひと先ず軍勢を犬山城に収めて家康の動きを見極めようとした。家康が並みの武将ではないことをよく知っていたからである。

しかし、信濃きつての勇将といわれ、度々の武功によって信長から武藏守の称号までゆるされていた森長可は、それを潔しとせず、八幡林に布陣したのである。

この武藏守長可については、この話と関わりがあるので今少し詳しく觸れておきたい。

森家といえば、秀吉没後は家康に傾き、関ヶ原では東軍に味方して戦後、信州松代城主から美作津山藩をへて播州赤穂藩に移封され、明治を迎えた家系であるがその祖については、審らかでない。美濃地方の出といわれ、武藏守長可の父可成の時信長に仕え、武功を以って、次第に頭角を現し、認められて、はじめて美濃金山城主に封ぜられた家柄である。その可成というのは、桶狭間で信長が馬を下りて襲おうとしたのを騎乗のまま襲う様に建策して成功させたといわれている程智略に富んだ武将であった。

信長の上洛に際しては、京都奉行という要職に任せられ、その後、浅井勢の動きが活発になり始めると、その前面の要衝佐和山城の在番を命じられたが、元龜元年九月二十日浅井勢の奇襲を受け、衆寡せず自ら打って出て壮烈な戦死をしている。性格なのである。長可もその父の性格を受け継いでいた。

しかし、この森家程多くの戦死者を出した家系も珍しい。父可成の戦死の四ヵ月前

には、長男可隆が父と共に信長の朝倉攻めの途上、手筒山攻略の際に戦死をしているし、降って天正十年六月二日の本能寺の変では、森蘭丸、坊丸、力丸の三人の弟達を失い、残ったのは、末弟の千丸と母と長可の三人だけであった。

母は、賢夫人で夫の死後、菩提を弔うため勝寿院妙向禅尼と号し、熱心な一向宗信者となり、美濃金山から、京都、大阪と旅を続け、三男森蘭丸を通じて石山本願寺と信長との和解に尽力したことは、有名である。

長可も十六才の初陣以来、父と共に信長に従い数々の戦場でその勇猛さと武功を認められ、特に武藏守の称号まで許されて、敵からは「鬼武藏」の異名で恐れられていた。

父の死後は、金山城主を継いでいたが、本能寺の変の直前に越後の上杉勢に備えて信長の命により金山城より信州海津城主に移封されていた。

しかし、一度信長が本能寺に討たれると、その周辺の国人達による一揆が起り、新城主としての不安定さが露呈し、急速、一揆勢と戦いながら旧領金山城に帰った。これなども支配者を失った戦国時代の武士社会の不安定さを物語る一つの例といえる。

この様にして、この度の羽黒村八幡林に於いて家康、信雄連合軍を迎え撃つことになったのである。これが小牧の戦いで長可二十七才の若さであった。

しかし、その勇猛さの反面、秀吉から差し遣わされた軍監尾藤甚右衛門に託した遺書の中で娘おこうに対しては武家より京の医者にでも嫁ぐよう諭したり、又末弟千丸には自分が万一の時は、金山城主の継承を辞退するよう書き遺しているのを見るとき父兄弟を相次いで戦いで失った人間長可の真情を垣間見る思いがする。

森家と信長の主従関係はこの様に深かったのだが、そうした関係では森長可しんちかの舅である池田恒興（勝入）と信長の関係の方が遙かに深かった。というのは、恒興の母というのは信長の乳母で、痴の強かった信長は、どの乳母を添えてもその乳首を噛み切ったが恒興の母にだけはよく懐いたといわれ、養徳院と号して得度したのちのちまで信長から「大御乳」殿と尊称して厚遇された。従って信長と恒興とは乳兄弟であり、早くから小姓として側近く仕えていたのである。だから信雄を織田家の後継にと思っていた家康にとっては池田勝入の秀吉への味方は、大きな驚きであり、誤算でもあった。

小牧山に布陣した家康は、秀吉の来援前に勝入、長可の軍勢を一蹴せんとして、三

月十七日酒井左衛門尉、奥平昌信、大須賀康高らの軍勢を早暁を期して羽黒村八幡林に出陣させた。

結果は血気にはやる武藏守長可が野戦に強い徳川軍の前に惨敗を喫した。「轆轤引き戦法」という退くと見せかけて敵が深入りした処を待ち構えている別働隊が襲うといった柔軟な戦術にかかり、深入りして疲れたところを新手に攻めたてられ、さすがの猛将長可も支え切れず、総崩れとなって、犬山城に逃げ帰った。長可の剛勇さが裏目に出た戦いでもあった。

この戦いで長可は、片腕と頼む勇将野呂助左衛門を始めとして多くの重臣を失った。これを犬山城から見えていた池田勝入は、助勢に打って出ようとしたが、「今打って出れば、必ず敵の術中にはまる」という稲葉一鉄らの必死の制止の前に思いとどまった。

それから十日後秀吉は、十万余の軍勢と共に犬山城に着いた。三月二十七日のことである。

直ちに小牧山の前面の樂田を中心に砦とりでを築いて家康、信雄連合軍に相対した。しかし、勝入、長可らの敗戦を知った秀吉は容易に動こうとしなかった。家康も又、同じであった。

この様に両軍相対峙したまま徒らに日がたつ中焦りを感じ始めた池田勝入は、「家康めの居城岡崎は、空城同然。この機に軍勢を催して小牧山の東方を隱密裡に迂回して岡崎に至り、一気に攻めれば、徳川軍は、屹度、混乱に陥ち入るは必定、この役を是非我等に仰せ付け下さいませ」と建策した。

はじめは、乗り気でなかった秀吉も勝入の再三にわたる申し入れに余り頑なにしりぞけると勝入らの離反を招くと憂慮したやむなく秀次と堀秀政の軍勢を添えて岡崎に向けて進攻させたのである。

勝入が岡崎進攻を思いついた背景には先の羽黒村に於ける敗戦の恥をそそぎたいという気持があったのである。

しかし、この進攻は、逸早く家康、信雄連合軍に察知され、その後の行動は、細作（斥候）や住民の知らせで逐一家康の陣営に届いていた。

家康は、直ちに酒井忠次、石川数正、本多忠勝らを小牧山の守勢として残し、自らは残りの軍勢を二手に分け、日没を待って相前後して密かに南下して、四月九日の子

の刻(午前零時)頃再び小幡城に結集した。

その頃、勝入らの軍勢は、小幡城の東方にあって、先頭の一、二番隊である勝入と長可らは遙か南の岩崎に達し、三番隊の堀秀政は金萩原附近に、殿である四番隊の秀次は白山林の台地に於いてそれぞれ真夜中の小休止をとっていた。

この様に隊列は延びきっており、襲うのには絶好の機であった。

小幡城に於ける軍議の結果、榊原康政、大須賀康高、水野忠重らの諸勢は、そのまま白山林の秀次の軍勢に襲いかかり、残りの家康、信雄の軍勢は、後方を迂回して敵の東側に回り、早暁の頃には市坂、白ヶ根辺りに本陣を構えた。

榊原らの諸勢が隠密裡に白山林の台地に達した時は、空が漸く白み始めた頃で秀次の陣営では朝食の休憩時であった。

榊原らの諸勢は、好機とばかりに一気に襲いかかった。不意をつかれた秀次の陣営は大混乱に陥った。まだ食事中の者、鎧を脱いでいた者など様々でその混乱を立て直す暇もなく潰滅的な打撃を受けて多くの部将を失い、秀次自身は可児才藏らの助けをうけて辛うじて逃げ帰った。

金萩原辺りに小休止をとっていた堀秀政の軍勢が遙か北の後方からパンパンというかすかな銃声を聞いたのは、丁度その頃であった。続いて敗兵があらこちから逃げて来て秀次勢の敗報を伝えた。

歴戦の勇将堀秀政は、さすがに落ちついてきた。

「敵は必ず勝に乗じてこちらに攻めて来る」と、判断し、直ちに銃隊を二段に構え、諸勢を隠して静かに待った。

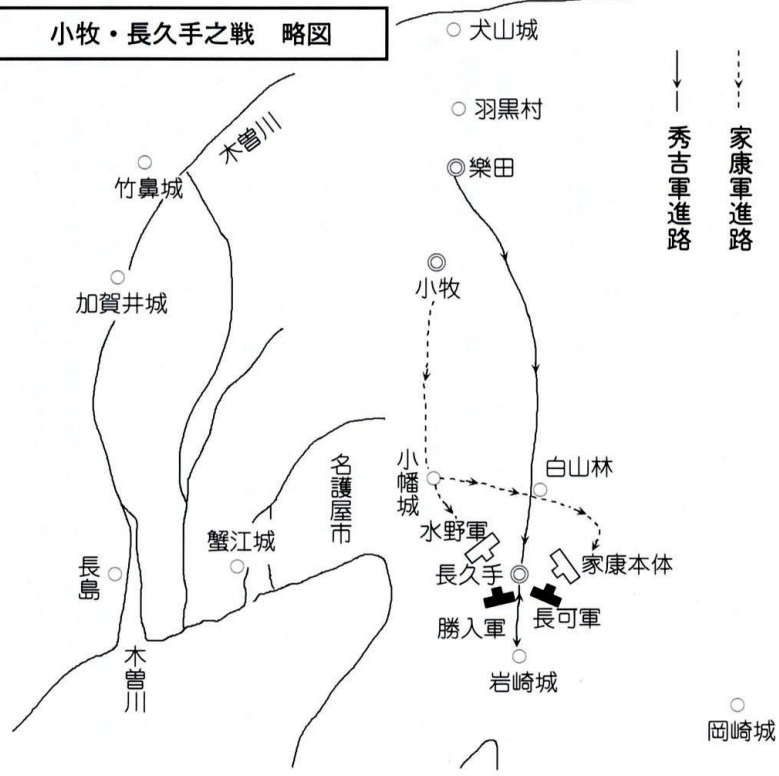
しばらくすると予想通り榊原らの軍勢は、敗兵を追い求めて攻めて来た。「身近かに来るまで絶対に撃ってはならぬ」と厳命し、殆んど目前に迫った頃を見計らって一斉に銃口が火を吐いた。

勝ちに乗じて油断していた榊原勢らが今度は大混乱に陥った。深追いをし過ぎたのである。加えて、勝ったとはいえ秀次勢との戦いの疲れと前夜来の強行軍もあって疲れ切っていたのである。

その機を逸せず秀政の軍勢は榊原勢に一斉に襲いかかった。榊原勢も懸命に防戦につとめたが、次々と名だたる部将も討れ、潰滅的な打撃を受け敗走した。

「深追いはするな」

小牧・長久手之戦 略図



敵が敗走するのを確かめてから再び全軍を高根辺りに集結させた。

その時である。秀政は、遙か富士ガ根から佛ガ根にかけ金扇の馬標を朝日に輝かせた家康、信雄連合軍の本陣が現れたのを発見した。

堀秀政は愕然とした。

一方先行していた勝人と長可の軍勢は、右手に見える岩崎城は、相手にせず、やり過ぎそうとしたが城の手勢が討って出て来たためやむなく、予定を変え城攻めにかかり、激戦の末、城を攻め落し、幸い先よしと一息入っていた時秀次勢や堀勢の戦いの報せが次々と入って来た。

この思いもよらぬ徳川勢の出現に勝人と長可は、兵をとりまとめる余裕もなく急遽、長久手目ざして北に引き返すと、前山と佛ガ根にかけて布陣している家康、信雄連合軍の精鋭と対峙した。

勝人は、直ちに堀秀政に使者を送り援助を要請した。しかし、神原勢との戦いに勝ったとはいえ戦力を使い果していた秀政は、勝人の要請を無視して戦場を去って行った。勝てる見込みはないと判断したのである。この時既に戦いの帰趨は決した。

堀勢に戦う意志のないのを知ると、家康は本陣を富士ガ根から前面の前山に進め、右方の佛ガ根の麓に本多勢三千を配置して、岩崎から反転北上して来る勝入、長可の軍勢に備えた。

己の上刻頃（午前十時頃）長久手に返した勝入勢は左方の岐阜岳の麓に布陣し、長可は右方の鳥狭間に據って家康の軍勢と対峙した。

戦いは、先ず両軍の放つ鉄砲の轟音で始まった。

一瞬の中に春の長閑な長久手の野は硝煙掩う戦場と化し、ただ、空に浮んだ雲だけが下界とは無縁かのように悠然と流れていた。

両軍は、次第にその距離を縮め、いつ、どちらが先に突入するかといった息詰まる場面が続いていた。慌ただしい動きと緊張で渴いた喉を豪胆にも前面の沼地に下りて潤そうとする家康勢の兵を長可勢の兵が追い上げるといった小競あいが二度、三度と続いていた。

一触即発の状態で、命をかけた高名争いの場が刻々と両軍の兵達の前へ迫っていた。

この様な戦況を望見していた野戦に強い家康の陣営では、右方のやや小高くなった

処に長可麾下の精鋭黒母衣組と思われる一隊が勢揃いし始めているのを側近の安藤直次が発見した。

「殿、あの右方に見えまする一隊は、長可めが誇る黒母衣組の者に違いありません。直ちに鉄砲組の者を左尾根に移し横手より撃ち掛けなさい」と勢い込んで進言した。

「安藤がいうこと尤もなり。急ぎ鉄砲組に使者を走らせて呼び集めいッ」

家康麾下の鉄砲組は十組あり、それを組頭が統率していた。一番の使者鶴殿兵庫が遣わされたが夫々が目前の敵に對するだけで余力はないという。二番の使者村越茂助の返事も同じである。

「何をぐずぐず致しておる。うむをいわず引き連れて参れッ」

家康は激怒した。

もしあの剛勇武蔵守長可の率いる黒母衣組の一隊が襲って来たら、死にも狂い程恐ろしいものはない。如何に徳川の精鋭といえども打崩される恐れは十分ある。家康は、焦った。三番の使者加々爪民部と次々と使者が走り、漸く、四十挺ばかり揃ったところで安藤直次が直接指揮をとり、黒母衣組の一隊に向けて猛射を浴びせた。

武蔵守長可にも油断があった。油断というよりも、家康の本陣の手薄な処を見きわめて、黒母衣組の者を集め、今将に家康の本陣めざして突き進もうとしていたところで、敵の銃口が待ち構えていることなどに気付く余裕はなかったという方が適切であった。

家康方の鉄砲は、猛射だけでなく正確であった。長可勢の中にバタバタと落馬する者、倒れる者が続出して隊が乱れた。

「これしきの弾にひるむことやある」

これが武蔵守長可の性格であった。彼は、騎馬のまま隊の先頭を駆けめぐり、怯む部下達を叱咤して前進を命じていた。

「殿、今しばらくお待ちを」

側近の一人が余りの猛射に諫めたが聞えなかった。長可は、この戦いが最後と思っ

てか、鎧の下には白の帷子を着込んでいた。これが絶好の目標になった。

徳川方の鉄砲組の数も次第に増していた。そして先頭に奮い立っている白い帷子を着込んだ騎馬の武將が名だたる武將であることは、誰の目にもよく分かった。

家康方の鉄砲組頭水野太郎作の配下の中に杉山源六という手練れがいた。彼は、密かにその騎馬の部将に近づくと充分に狙いを定めて引金をひいた。

その瞬間、武藏守長可の体が大きくのけ反り、宙に舞う様にして落馬した。弾は、眉間にあたり、殆んど即死に近かった。

数名の側近が長可の体を後方に移そうと近づいたが、それを見た長可勢の間には動揺が起きた。

これを見て、家康勢の中から前面の沼地を越え、堤を真っ先かけて駆け上がった行く者の姿が見られた。家康側近の旗本平松金次郎と鳥居金次郎の二人であった。二人の間は横に並んで三十間ばかりの隔たりがあったので、どちらが先であったかよく分からなかった。ただ平松の方が家康の本陣に近かっただけに家康には平松の方が鳥居金次郎より先に見えた。

堤に駆け上った平松は

「八幡、八幡」

と、十文字の槍尻で地面をたたき、大音声に叫んで勝入勢の真っ只中へと突き進んで、これも勇ましく手向かって来る敵の母衣武者山田八左衛門と激しく槍を合せた。

一方、鳥居も負けじと向かって来た仙田主水と槍を合せ、これに続いて他家康勢も突き進み、ここに両軍入り乱れての戦いとなった。

主を失った長可勢は、既に浮足立っていた。

槍をすごいて突きかかると、大野太刀を振り回す大剛の者、馬上で取り組んで共に落馬して組み敷かれ、あわや首を掻き切られようとするところを供の従者が傍から駆け寄って危く命拾いをする武者、悲鳴と怒号の飛び交う人間の極限状態の中で尚、両軍の兵達は、主君のため高名を争って戦場を駆けめぐった。

この一番槍につづいた武刃者達の中に本田八藏という旗本がいた。平素は無口で余り目立たず、性格は小心な律儀で生真面目な男であった。

八藏が堤の上に駆け上がった時、倒れている主人を供の家来が抱え起こそうとしているのが目に入った。身につけている鎧といい、他の武具といい、名ある武将には違いないとは思ったが、慌ただしい戦場でのことなので、それが武藏守長可では、などと穿鑿する余裕はなかった。

八藏は、太刀を振るってその武者に近づいた。次第に多くなる敵に怯んでか、その供の者が逃げたので、倒れている武者に近寄ると、まだかすかに息があることが分かっ

た。

咄嗟に八藏は上に乗ると首に刀を当てた。何の抵抗もなく首は落ちた。

その瞬間思わず深手の者を討ったという負い目を感じて首を捨て、証拠のためにとその差していた太刀を取って他の戦場へと向かった。

既に長可勢は、総崩れとなっていた。

それを見た勝入は、誓の仇討とばかりに部下を叱咤激励するが、浮足立った退勢は、止めることは出来なかった。

この戦況を早くも察知した家康は、

「最早、我が傍らには備えは、いらぬ。勝入が陣に総がかりせよ」と命じた。その言葉も終わらぬ中に側近の若い旗本達は我こそは、高名をたてんものとはかりに勇躍して勝入の陣に向かった。

勢いに乗った徳川勢の前に勝入勢は、次第に追いつめられていた。樂田を出発する時は六千を数えた兵も既に雑兵は逃げ散り、名だたる武将も次々と討れ、それを見た

供の者は逃げ、今では床几に腰を下ろした勝入の周りには僅かに二、三十人ばかりの近習衆しか残っていないかった。

そこに向かって来たのは徳川方の旗本安藤直次、永井伝八、蜂屋七兵衛といった面々であった。

今は乗る馬も無くなった勝入は、身近かに迫り来る敵を見ると、自から十文字の槍をとって立ち上がり、真先に駆てくる安藤直次に向い

「せがれめ、小癩なり」と健気に立ち向かって行った。

しかし、近習衆は、散り散りとなり手助けする者もなく、数合の槍合わせで深手を受けたところを永井伝八が組み敷いて首級を上げようとした。

その時、傍らから蜂屋七兵衛が飛び込んで高名争いとなったが安藤直次が

「七兵衛、卑怯なり」とたしなめたため七兵衛は恥じて詫び、その後敵の近習衆の一人を討って面目をほどこした。

父勝入の討死を知った嫡男の元助は、無念の余り部下の諫めを振り切って単騎父討死の場に引き返し、安藤直次らと渡り合い、激闘の末華々しく討死した。弱冠十七才

であった。

正午過ぎ、さしも激しかった戦いも漸やく終った。後年、徳川の諸将がこの時程激しい戦はなかったと述懐する程であった。

この敗報に接した秀吉が急速、援軍を率いて樂田を発したとの報せがあつて、慌ただしい中に主だった首実驗のみ行われ、恩賞の沙汰は後日行われた。

勝人を討った永井伝八は、千石の加増、勝人嫡男元助を討った安藤直次(後の帯刀)は、五百石の加増であつた。

勝人父子の亡骸は、その采配と太刀を永井伝八が持ち、内藤四郎左衛門と丹羽六太夫とを副使としてこれを家康から信雄に遣わした。信雄は、その戦功を賞し、勝人佩用の名刀「篠の雪」を永井伝八に授けた。

一番槍の高名は、平松金次郎で三百石の加増であつた。その結果一番槍とされた鳥居金次郎は

「一番槍と二番槍の見さかえもつかめ程の主仕えることの愚かさよ」と怒つて、戦場を去つた。

その後、鳥居金次郎は、たまたまこの戦いで槍を合せて別れた敵の母衣に金の半月のしるしのあるのを思い出し、探し尋ねたところ堀秀政の家来である長瀬小三次であることが分かり、わざわざその武士を尋ね、思い出話をした後、鳥居は小三次に脇差を遣わし、小三次は、鳥居に刀を与えて記念とした。

とかくするうちに、この事を知つた蒲生家から

「一万石にて召し抱える」

と誘いの者を差し向けて来た。

願つてもない仕官の口に喜んだ鳥居金次郎は、その誘いを受けて、蒲生家に仕えたが、主家をかえた者への朋輩の目の冷たさもあつてか長続きせず、加えて生来の狙介さも災いて金沢に去り、喧嘩口論の果、非業の死を遂げた。

一方、一番槍となつた平松金次郎は数年前天龍川の新井の渡し場で同乗した甲州の武士温井某(一説に柏原新五郎ともいう)が平松の従者の無礼を咎めて手討ちにした事があつた。そして、先に陸に上つていた平松にその事を告げると、平松は「無礼を致したとなれば致し方なし」といつて何らなすこともなく別れたので、その舟に同乗している人々は勿論、その

ことを伝え聞いた朋輩達は、

「憶病風にふかれたか」

と嘲けり笑つた。

しかし、平松の矩軀が肥満した体を平素から「さぞ、体のとり廻しの不自由なことであろう」と、からかつていた家康だけは

「平松の目の鋭さの中にはただならぬものがある」といつて朋輩達をたしなめていた。

果してその期待通り数年後の長久手に於いて愈々槍合せの戦機が熟したと思われた時、懸り兼ねている朋輩を尻目に真つ先かけて池田勢のただ中に突き進んで一番槍の高名をたてたのである。

そして戦後、出仕の中で自分を嘲けり笑つた朋輩に向い

「吾、胎内より厚恩を受け、みだりに一命を捨てじと思ひしが、今は早思い残すことはなし。誰にでもお相手致す」と高言したが誰も答える者がなかつた。

それ程の思慮深い勇者ではあつたが、その後、秀次より密かに

「一万石にて召し抱える」

との誘いを受けた。余りの高禄に心動いた平松は、親しい朋友に別れを告げて京に向つた。このことを聞いた家康は

「不屈千万なり」

と激怒した。先に一番槍の高名を認められなかったことを不服として戦場を去つた鳥居金次郎には、それなりの理由はあつたが、平松には、それがなかつた。

家康は、直ちに側近の坂部治兵衛、渡辺半藏、河村善七郎、大久保興一郎、続いて坂部三十郎と大剛の平松金次郎なればというこで追々と討手を差し向けた。

その中の一人坂部治兵衛は、袋井で追いつくと、

「これは奇遇、これからどちらへ」

と、さり気なく馬をすり寄せた。

一瞬驚いた表情をしたのを坂部は見逃さなかつた。しかし平松も大剛の者、直ちに落ち着いた表情に戻つて、

「おお坂部殿か、これよりちと、思うところあつて本坂越えにて遠州可睡齋(曹洞

宗の禪寺)に参ろうと思うてな。ところで貴殿は」

と、ことも無気に問い返した。

「これは申し遅れた。拙者は、横須賀(遠州)の兄三十郎のところに所用あって参るところ。丁度よい道連れ、ご同道致そう」

ともに何食わぬ顔で言葉を交しながら打ち連れて行く中に別れ道にさしかかったので坂部は、急に馬をとめた。

「それでは平松殿、某暫くは横須賀に滞在故、久しく会うことも叶わねば」

と別れの挨拶をいいながら秘かに斬りかかる隙をうかがいつつ先に馬から下りた。それにつられる様にして鳥居も馬から下りた。その機を逸せず

「上意」

治兵衛は、抜く手も見せず切りかかったが、この事あるを予期していた平松は、素早く体をかわすと

「卑怯なり坂部」

と、坂部に向かって大袈裟に斬りつけた。太刀は坂部の眉間を深く切りつけたが、坂部も剛の者、屈せず

「落人あり打ち留めよ」

と呼ばわりながら闘う中に付近の郷民が平松を取り囲む様にして集って来た。この様子に叶わじとみた平松は、身を翻し北の方、可睡齋に向かって走り、逸早く寺に身を隠した。

しかし、その中においおいと集まって来た追っ手の者達の様子を見た平松は、最早これ迄と現われ出て

「かくなる上は、誰の手もわずらわすことなく果てたし。おのおの方さらば」と深く自害して果てた。

これで一番槍、二番槍の高名者は、奇しくも揃って非業の死を遂げたことになる。

長久手の首実験で武藏守長可の最後については確なことは分からなかった。杉山源六の弾にあたって落馬したところを周りの黒母衣組の者が駆け寄って、かつぎ上げようとすると機に両軍入り乱れての乱戦となったからである。

その詮議になった時本田八藏は

「若しやこの刀が武藏守のものでは」

と恐る恐る差し出した。

そこで、たまたま信雄の本陣に随従していた清州の商人白金屋を呼んで鑑定させた。家康以下側近の居並ぶ前に出た白金屋は、その太刀を受けとると

「ではごめんを」

と先ず柄から鞘に目をうつし、続いて鞘をはいり刀身を調べ、最後に目釘を抜いて銘を入念に確かめてから自信の表情を見せて言った。

「この太刀は、確かに長一様(長可)が昨年、我らに命じられてお誂えなされしものに相違ございませぬ」

それを聞いた八藏は、自分の討った敵の首が長可のものであるという確信を得て、その時の模様をありの儘に述べた。

しかし、側近達は

「刀だけでは証拠にならぬ。直ちに引き返してその首を探して参れ」と命じた。

八藏は、やむなく戦場に引き返したが、もとより確かな見覚えなどある筈はなく、自分が討ったとはいえ敵味方人乱れての戦いの最中である。顔など見覚え余裕はなかった。

八藏は、まだ散乱した戦場からそれと思しき首を探し当てて持ち帰り、首実験の場に差し出した。

異様な沈黙の後

「似つかわしいが違うのでは」

という声がかくとも聞かぬ、続いてそれを機に嘲笑にも似たざわめきが始まった。

首は、戦場に放置されて人馬に踏み荒されてか、余りにも傷んでいて、同情は、弾の飛び交う馬上で部下を奮ひ立たせていた武藏守長可に傾いていた。

抗辨をする雰囲気はなかった。又、八藏にも深手の者を討ったという負い目もあって、高名の夢は空しく消え、屈辱と無念の思いに唇を噛んだ。結果、八藏には何ら恩賞の沙汰はなかった。

その後、本田八藏の名が再び、出てくるのは、約二カ月程の後に起きた蟹江城攻防の時である。

話は、長久手の戦にもどる。

長久手に於ける勝入、長可らの敗戦を知った秀吉は、直ちに全軍を引きつれて長久手に向った。

秀吉が夕暮れ頃長久手に着いた時家康は、既に小幡城に全軍を収めて立て籠り、静まり返っていた。前夜半から翌日正午頃までの戦闘で手勢は疲れ切っており、これでも新手の秀吉勢に立ち向えば苦戦はまぬがれないということを家康は知っていたからである。

細作の報告でそれを知った秀吉は

「機敏なる行動であることよ」

と、その用心深さに地団駄を踏んで悔しがった。そこで秀吉は、その夜にかけて小幡城の攻略を策したが稲葉一鉄らの

「古来より夜の城攻めは、覚束なし。明朝を期して行うべし」

という諫めによってとり止めることにした。

しかし、小幡城に籠った家康は側近達の

「小幡城の構えは粗略でその上食糧、弾薬も少なければ秀吉の軍勢攻め来たらば苦戦は必定、今夜半の中に秘かに小牧に撤収するのが得策かと存じまする」

という策を入れてその夜の中に小牧に向かって隠密裡に帰った。翌朝細作の知らせでそれを知った秀吉は、又しても家康の機敏な行動に

「敵ながら聞きしに優る戦上手かな」

と賛嘆して空しく楽田に引き揚げざるを得なかった。

この様にして両軍は、再び楽田と小牧に據って対峙したが、互に相手の出方を覗うのみで徒らに時が流れた。

これを見て、秀吉は、一旦軍を納めることを決意し、小牧の西方にある加賀野井、

竹鼻の両城を攻め落して大阪に帰った。

その後には起きたのが蟹江城の攻防である。

大阪に帰った秀吉は、家康との全面的な対決は避け、調略によって小牧周辺の小城を攻め落そうとし、秀吉側に味方した瀧川一益に蟹江城を手中に収める様命じた。

蟹江城の守将佐久間正勝の家老前田種利が瀧川一益の従弟であることを利用しようとしたのである。一益は守将佐久間正勝の留守を幸いに秘かに前田種利を訪れ、味方に引き入れると、水車の将久鬼嘉隆と協力して三千の手勢を二百余艘の軍船で海上か

ら入城させようとした。

急を聞いた家康は驚いた。

蟹江城といえば、清州と信雄の居城長島との中間にある戦略上の重要拠点である。ここが敵の手中に落ちると清州と長島は遮断されるだけでなく、小牧は南北から挟撃されることになるからである。

しかもこの城は、長良川河口特有の水路が縦横に走る湿原地帯で潮の干満もあって、平城ではあるが攻めるに難く守るに易い拠点である。

この報せを聞いた時家康は丁度沐浴中で浴衣の儘戦場に駆けつけたといわれ、秀吉が柴田勝家との決戦に赴く時岐阜から賤ガ岳までを一夜の中に駆けつけた話と共に後世に語り継がれる程の早さであった。

幸い家康が駆けつけた時は、瀧川一益の手勢は、まだ七百程しか上陸しておらず、残りの軍船は干潮のため遙か沖合に碇泊していて、城には前田種利の手勢と合せて千人余の兵が守っていた。

戦いは六月十六日から二十九日まで十三日間に渡って続けられ激戦の末、落城した。若しこの蟹江城が秀吉の手に落ちていたら戦局は、家康にとって重大な局面を迎えねばならなかっただけに家康の喜びには一入のものがあつた。

本田八藏は、この蟹江城攻防の一戦に於いて敵陣深く駆け入り、壮烈な戦死を遂げた。

その死を聞いた家康は、深く憐惜し、「ソノ忠烈萬世ニ輝ク」と激賞したと語り継がれているが、詳しいことは、分からない。ただ、『家忠日記』増補中、長久手の戦いの添え書に

「本田是ヲ悔ンデ、此年六月蟹江城攻防一戦ノ時、敵陣ニ深く駆ケ入りテ遂ニ戦死ス」と簡潔に記されているのみである。

本田八藏が長久手の戦の後その日まで、どの様な思いの日々を過ごし、どの様な覚悟で敵陣に駆け入ったかは、この短かい字句の行間に覗い知るより外はない。

短歌

在賀彦一 歌集

『歌杖』

山崎歌人協会 栗山節子

在賀彦一氏の第二歌集『歌杖』を紹介するに当り、故人となられた氏に心からご冥福をお祈り申し上げてペンを取る。

『歌杖』は『石工の歌』に次ぐ第二歌集で、昭和五十九年から平成七年までの約五百首が収められた。歌集名について「歌を支えにして日々を送っている私には『歌杖』がふさわしいと考えたことと歌への感謝の気持ちから」とあとがきに記され、『石工の歌Ⅱ』はサブタイトルとなっている。

石工の宿痾ともいうべき塵肺症に、人工透析が加わる苦しい闘病のなかで残された命を真正面から見つめ、その一瞬一瞬の心の振動と哀感が読む者の心に響く歌集となっている。

大いなる石切機にも小づちにも命をか
けし思ひは深し
限り無き思ひで染みし工房を閉むる癒
えざる病に負けて
石工具も何もない何時まで病む
胸抱き立ち尽したり

父より受け継いだ七十年の石材店を閉
ずる無念をこれらの歌は端的に物語って
いる。

貯へはあると言ひつつ古妻の長病むわ
れに頬を寄せ来ぬ
花畑の手入れして来し妻のふともらせ
り花の命か短し
三匹の山女釣り来て大き方われに食べ
よと子は皿にのす
寒きうちは病院に居よと言ふうから寒
くとも吾はわが家がよし

七月二十一日、福知溪谷休養センター
での『歌杖』を読む会に参加し、奥様と
ご子息又弟英一様にお目にかかりひしひ
しとご家族の温かさに直に触れ感動した
のを覚えている。

むくみたる足に歩めばへうへうと廊下
が上下左右に動く
新らしき眼鏡を買へり今しばし生きて
移ろふ巷を見むと
石見れば石に心を惹かれをり石工一生
の己が身病みつ

秋風を白しと云ふを誦ひて山裾を吹く
風の中ゆく
花盛るれんげの園に移ろふは風か心か
眼鏡を外す
残されし私の命の方程式解かず置こ
う解けば悲しき

死ぬことも生くるもならず独り居の寂
びに耐へかね飯食残す
透析をやめたる命幾日を保たむ問ひに
誰も答へず

病気が進むにつれ歌境は澄み、自然の
いとなみにも敏感に反応しまことの歌詠
みらしく秀歌を遺し人生を終えられた。
省三も泰治の歌もおしなべて遺稿集と
云ふは寂しき

新田弘美 歌集

『檜四万本』

檜の山に

春の雪降る

山崎歌人協会 稲村幸子

合歡の木はすでに眠りむ裏山に夫の
チェンソーの音澄み渡る

女の来る 所ではないといふ 夫の眼
に 逆らひて、競り市の一隅にゐる
木の香匂ふ升酒を一息に飲み干して雪
降る競り場にむかふ男ら
男を男とも思はぬやうな言葉を吐き木

平成七年「師を恋う」の中の一、在
賀氏は直接の歌の師である藤村省三先生
また、国民文学の重鎮であった大塚泰治
氏を深く崇敬し、その遺歌集の寂しさを
詠まれたものである。この頃から第二歌
集は命ある内にとの想いが強く「病院の
白い天井を見ながら、歌を思い歌の師を
慕い、歌友達を懐かしむ日を送っていま
したが、いつも頭の片隅にあったのが

『第一歌集』の事でした。」とあとがきに
ある。病床の氏の願いをご家族と短歌春
秋の主宰をされている津山秀夫先生のご
協力によって、命ある内に手にされたこ
とは歌の友達として哀しみの中よろこ
びであった。

合掌

材業を守る日常

樹齡目録と立木とを照合する夫に歩幅
合はせて一日したがふ
六栗杉の産地わが村にも儲け多き外材
質挽きの製材所が建つ
ボルネオラワンのの安値に圧されて買ひ
叩かる樹齡百年の無節檜も

手形割る日は迫れるに百本の楡は雪の
競り場に眠る

五尺余りの積雪に埋れし集材機が凍て
て割れたればまた金が要る

国産材の時代は来むと少年のごとき夢
もつ夫を危ぶむ

歌集としては珍しい表題『楡四万本』
を解説するかのような歌群が一卷四三四

首の前半に多く見られる。

木材業を手広く営む一家の主婦として
の日常が活き活きと表現されていて、主
婦というよりは、むしろ夫と一心同体と
いう意気込みさえ感じられる。

吉野昌夫氏の序文の中に、その歌風を
「骨太」と評しておられるが、確かにそ
うである。率直に具象的に、土地こ
とば、破調などを自在に駆使して詠まれ
ているのがこの歌集の特徴と言えよう。

肥料撒きて疼く右腕を梅雨冷えの夜半
の畳に投げ出して寝る

胸の中のこだはりも田の水に捨てなが
ら炎天下除草機を押ししてゆく

減反面積三アール不足を指摘され花を
つけたる稲刈り倒す

作付面積は五十アールゆゑ猪の食べ残
しにても保有米はある

農村に住み、先祖からの農地を受け継
げば農業もまた本業である。農政への不
満を胸に畳みこんで猪と共存する心構え
も深い。

意地を通して疲れたる一日と思ひつづ
こごまりて白足袋の靴をはかず

傷つきやすきわが胸に棲む侏儒のゐて
鬼神ともなり菩薩ともなる

目頭をはなれてしまひたるものを結び
ゐしはずの口がのみこむ

自嘲とも自省とも付かぬ思いに眠れぬ
夜、人に見せぬ涙を呑むこともある。

閩賀河原を朝発ちゆきし筏師よりその
夕べ網干の蝶をもらひき

甚やんの田んぼに猪の出でしことこの
村の今日の唯一の話題

隣田の利吉さんが焚火をしてくれて霜
にぬれたる手袋あぶる

おさとさんに畦焼日和よと誘はれて地
神坊梅の木田の畦焼きをせり

おるゐばあさんの孫の嫁私が三十三回
忌取りしきらせてもらふことになる

ふんだんに使われてゐる地名人名俗語
などが、さながら山村風物詩的な素朴な

韻律を奏でて、愉しく読まされる。

三十五人の村人が昨日植ゑ込みし楡の
山に春の雪降る

昨日植ゑし楡四万本が床柱に育つまで
地球は在るであらうか

私生活詠が一躍地球規模となつて一巻
を見事に締め括つてゐる。

森林王国栗に根着いた『楡四万本』
が、どのような銘木に育つてゆくであら
うか、期待をもつて見守りたい。

各地短歌祭入賞入選作品

(平成八年度)

◇第八回神戸短歌祭

(四月二十九日・神戸市立婦人会館)

・入選

競り市に買ひ来し仔牛ら鬼の面ほどな
る角を突き合はしをり 伊東まさ子

◇姫路歌人クラブ短歌大会

(六月十六日・姫路市民会館)

・姫路市長賞

コンバインの反転すばやくやりとげて
男が軍歌をまた口遊ぶ 森谷 康弘

・姫路市教育委員会賞 一席

餌代の嵩むばかりの牛飼ひとつぶやき
てより夫の黙しぬ 伊東まさ子

・入選

危ふげもなく一輪車こぐ少女左右の手
は鳥の翼のやうに 稲村 幸子

◇第十五回栗粟郡民短歌祭

(九月一日・千種町センターちくさ)

・兵庫県知事賞

押し売の手荒く閉めてゆきし戸の明珍
火箸がながく鳴りゐる 安東はつ子

・千種町教育委員会賞

中国の核実験を聞きし日も峽の泥田に
早苗挿しいつ 南 裕之

・栗粟郡歌人連盟賞

選曆を祝ひて吾子の奢りくるるおでん
の芥子が涙をさそふ 森谷 康弘

手植より楽と思へど泥の田に足とられ
つつ田植機に従く 北 隆治

警笛に尻尾を巻きて振り向ける犬は一
瞬人の顔せり 菅谷美津子

◇ふれあいの祭典ひょうご96

(十月二十七日・赤穂市文化会館)

・佳作

その昔の苛められっ子いぢめっ子老斑
しるき手に酌みかはす 山崎 智絵

降りしきる雨の霰に閉まれて小さき傘
の範囲を歩む 富和かず子

◇西播磨短歌祭

(十一月二十一日・西播磨文化会館)

・西播磨文化会館賞

一本のビールに表情やはらぎて独り暮
しの植木屋帰る 安東はつ子

・西播磨文化協会連絡協議会長賞
松茸が入っていますと耳しいの姑に紙
片渡してよそう 菅谷美津子

・入選

ほとばしる滝をよぎりて青鷺の羽搏く
方に空ひろがりぬ 近嶋 タミ

われの手を傷をいたはり盲ひ子の剥き
て瘦せたるじゃがいもを煮る 森谷としゑ

俳句

句

山崎俳句協会青嶺句会

秋久光子

霊場書写山を訪れて

平成八年四月十四日青嶺句会恒例の吟行日。今年は桜の開花どきに雪が舞うと云った異常な天候、そして今回は少し淋しい参加者十五名となってしまふ。

九時すぎに山崎を出発、沿道の桜もちらほら咲き、その分菜の花が川岸を黄に染めて美しかった。十時前に着き間もなくロープウェイに揺られて山上へ。昨年の大惨事より二度目の春。桜を愛でる人も多くゴンドラが次々と参拝者観光客を吐き出す。

満開の花にゴンドラ一揺れし 光栄
ゴンドラを降りれば花の聖地あり 薫風
山々に参拝者の掲ぐ梵鐘が響き渡り、花の下では馬車が長閑に観光客を待っていた。

うららかなや参詣鐘の鳴り止まず

君子

観光の馬車は急がず花の道 南嶺
花の下観光馬車の一休み とみ代
うららかなや人馬車客を待ちあぐね 悦生

登り行くほどに桜の蕾は堅い。坂道の左右に立像、座像の慈愛を受けながら「慈愛の道」を登る。高い回廊の舞台造りの円教寺に着く。善男、善女の手向けの線香に煙る摩尼殿へと参詣す。

出逢いつつはなれつ句作花の寺 緑山
弁慶のお手玉石や春うらら 美保子
春うらら耳ふくよかな葉師仏 栄子
辻々に札所観音花の道 駆雲
指細き手観音花の冷 光子

登山の一人が親切に案内して下さる。さすが西の比叡山樹齢数百年の杉が天に伸びている。講堂、食堂と重要文化財の建造物に圧倒される。一角には本多家の墓所があり、軒瓦に立葵の家紋が苔むしている。五棟の堂がひっそりと佇む

宝物館の脇道を下ると奥の院へと出る。護法堂拝殿、和泉式部の歌塚など静寂の中に鎮まっていた。

山脈句会詠草

父の忌や梅青々と葉影埋む

浅田 蕪耕

早苗響て鎮守に揃ふ里の人

池田 陶瓦

韋駄天の野分の雲をおそれけり

宇野 幸子

実梅挽ぐ長き余生の女の座

岡田 瑞穂

錦敷く掃くには惜しき落葉かな

小倉 つね

こう苜が香りて知らず天気報

小倉れい子

香水も美食もしらず農婦老ゆ

尾崎いつえ

かくれ滝けふは三すじの糸となり

垣口 翔人

梢より染り初めたる今朝の冷

高野 薫風

夜長の灯はずみてめくる新刊書

高野 南嶺

父祖の汗染みる田畑の継ぐ子無く

小嶋 弥生

風を得て猛りにたける野焼の火

小畑 柏人

万燈籠点せど暗し霧の塔

小紫 いく

朧夜や何を鋭き声山狐

田中 恵



コスモスを咲き巡らせて無人駅

田中やえこ

連ひらく極楽浄土のこぼれ花

牲川 信子

孫負ひて淡き虹立つ茜空

西村 好子

まだ知らぬことばいたたく秋の句座

畑林かづえ

晩学の辞書を片手の秋燈下

原田 久代

過疎の村荒れた田畠の花野かな

姫野マサ子

セーターをほどきつ編んで日も暮れる

福田 祥栄

大花野蘇州広野の汽車の旅

前野さつき

絵手紙に描きし青梅ことばそへ

前野寿恵子

当家終え気疲れの背へ森の霧

三木 幹彦

米寿まで生給はりて有難き

山野 源子

生も死も神の意のまま敗戦忌

横江 柏峰

青嶺句会詠草

箱出でし雛この世の息を吸ふ

芦田 八重

花果て沖の漁火瞬きぬ

秋久 光子

髪洗ふ女に戻るしまい風呂

石野 光栄

外灯の一つ一つに火蛾群るる

大谷 延子

ネックレス光る素肌の夏めける

高野 南嶺

千ヶ峰千の峰々天高し

高野 薫風

水温む湖畔のボート塗りかへて

下村 君子

天高し鉄塔光る稜線に

杉山美保子

疎開の子いまは何処に柿の花

田中 良子

思索する一人居る部屋肌寒し

鳥羽チエノ

天高しゴールへ力む兒のリレ

友沢 恭子

炎天を来て炎天を帰り行く

永井とみ代

雑草の生命したたか下萌ゆる

中尾 悦生

吉凶は神の手にあり初詣

原田小次郎

騎馬戦の大将对決秋高し

原田 駆雲

うすき髪洗ふて老の一日昏る

秦 千里

老いたればせめて清しく髪洗ふ

春名 寿女

云はでもの事云ひし悔水を打つ

藤家 千代

肩書のとれたる暮し水をまく

山口 栄子

下萌や酒の大樽並べ干す

山田 東軒

大牡丹ためらひ乍ら剪りにけり

門積 緑山

新緑に埋もれて終ひし比翼塚

植木 遙子

老木にまだ力ある柿の花

岸野 昭三

銀漢や征きて還らぬ人をまた

福田 泊水

さわらび句会詠草

天高し父を越したる子の背丈

小林 紫生

行きあひて旅に見まねの盆踊

壺阪加代子

ゆるがざる一言のあり半夏生

薄木満寿恵

木犀や珠玉の日々は過ぎ易く

本條 淑子

母留守の子等は素直や秋桜

庄 昌子

湖に生る新涼樹々をそよがせて

川崎 栄子

三世代の日々の起伏や穴まどひ

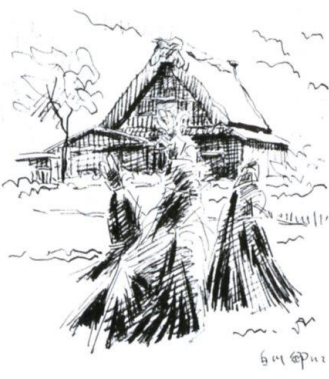
藤井 七代

大花火些事も大事もはるかにす

山岸 園子

気がかりも薄雲も晴れ今日の月

山中 正子



塩

香川短期大学学長

北川 博 敏 (山崎町東鹿沢出身)

塩は古くから人間が生きていく上で必須の食品とされてきました。しかし、人間が塩欠乏で死んだ例は少ないようです。日本では、僅かに飢饉の時に山に入り、木の葉や草ばかり食べていた人が死んだのが塩欠乏ではないかと言われています。

もちろん、塩の成分のナトリウムは成人体内に約一〇〇g含まれ、細胞の浸透圧の保持、その他の代謝に必要です。また、塩素は約一五〇g含まれて胃液の塩酸の成分です。ナトリウムや塩素が不足すると人は生きてゆけません。しかし、塩として摂る必要はないようです。

人間が塩を意識して摂る必要がないのは、雑食で、動物を食べるからです。例えば、イワシには一〇〇g当たり〇・九gの塩が含まれています。塩イワシにすれば約六gの塩が含まれるようになります。

肉食動物も同じ理由で塩を必要としません。しかし、草食動物は大量に塩を必要とします。それは動物を食べないことに加え、植物にはカリウムが多量に含まれていて、これが体内のナトリウムを排泄するからです。

前述のように、飢饉で塩欠乏が生じて死者が出たのは、動物を食べ尽くして木の葉や草ばかりを食べていたので、体内でナトリウム欠乏が生じたためと思われる。

また、人が古くから塩を必須と思いついたのは、身近に飼っていた牛や馬が塩を必要としていたのを見ていたからだと思えます。

もちろん、塩は調味の上で重要です。その上、食料の貯蔵に必要でした。このため、古くから人間には塩の不足よりも塩の過剰が問題でした。とくに日本人は塩を多く摂っていました。そして、塩の過剰摂取が日本人の国民病といわれる胃がん、高血圧、脳卒中の原因となりました。

昭和四十年に科学技術庁の資源調査会が「食生活の体系的改善に資する食料流通体系の近代化に関する報告」を発表しました。この報告は一般にコールドチェーン報告と呼ばれているもので、日本人の健康水準の向上には減塩が必要で、そのためにはコー

ルドチェーン、つまり、塩を必要とせずに食品流通が行える低温流通体系を作れということでした。

この報告後、塩の摂取量は年々減少し、昭和六十二年には一日一人当たり二・七gになりました。それが、昭和四十年頃から日本人の平均寿命が伸び始めて、世界一になった理由の一つになっています。

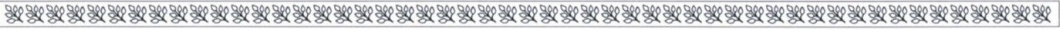
ところが、その後に塩の摂取が何故か多くなり、平成五年には二・八gになりました。厚生省が目標としているのは一〇g以下ですから、まだ日本人は摂り過ぎです。加えて、再び多くなりつつあることが問題です。

私は学生にラーメンのスープは全部飲まないようにと注意しています。ラーメンの



宇多津臨海公園のミニ塩田

中央の塔がゴールドタワー、遠方の建物が香川短大



スープ一食には六g近い塩分を含んでおり、気を付けることにより、減塩が可能です。また、果物を多く食べるように勧めます。外食していると果物や野菜が不足しがちになりますが、果物にはカリウムが大量に含まれていてナトリウムを排泄する作用が期待できるからです。例えば、柿には一〇〇g当たりナトリウムは一mgしか含まれていませんが、カリウムは一七〇mg含まれています。

ところで、私の勤める香川短期大学は、瀬戸大橋の四国側入口の宇多津町にあり、塩田跡地に建っています。この地に大規模な入浜式塩田が作られたのは徳川吉宗の時代ですが、広さ約二〇〇ha、一つの塩田としては日本一でした。それがイオン交換膜を利用する化学的製塩の普及で、昭和四十七年に廃田になり、瀬戸大橋が完成した平成元年に埋め立てられ、宇多津新都市となりました。

香川短大は、埋め立て直後に普通寺市からこの地に移転しましたが、今では一五〇m高さのゴルドタワー、世界のガラス館、七つの映画館を持つマイカルなどがある近代的な街になっています。海岸沿いには臨海公園があり、入浜式のミニ塩田や、塩の産業資料館も作られています。

普通寺、琴平詣りのついでに、香川短大にお寄り下さい。近くをご案内致します。また本学にはパソコンが二五〇台あり、そのうち一五〇台をインターネットにつないでいますので、今、話題のインターネットの実習も可能です。



筆者のプロフィール

1955年京都大農学部卒フルブライト留学生としてイリノイ大大学院を経て、57年京都大大学院博士課程終了。香川大農学部教授。定年退職後1995年から現職。「カキの栽培と利用」「グルメの哲学」など著書多数。園芸学会賞など受賞。

アジアへ、そして世界へ

ガンバ大阪チームドクター

柳 田 博 美 (山崎町出水町出身)

ブローケ

日本五輪男子サッカー代表は七月二十一日、アトランタオリンピックの予選リーグ初戦でブラジルを破り、「奇跡の勝利」とマスコミに報じられ、アトランタ五輪前半の話題の中心となった。今回、チームドクターとしてチーム結成時から本大会まで帯同させていただいたが、その思い出のいくつかを紹介したい。

ブラジル戦のこと

正直言って勝てると思わなかった私は、試合終了のホイッスルを信じられない気持ちで聞いた。思わずベンチから飛び出し誰彼なく抱きあつた。マイアミ、オレンジボウルのスコアボードにはBR A 0 1 JPNのスコアが……今世紀最大の番狂わせが、たった今、目の前で起こった。サッカーの国際試合で日本が世界最高を誇るカナリア軍団をもの見事にねじ伏せてしまったのだ。大会前は引き分けで上出来と思われていたブラジルに勝てたのはなぜか？

それはチームとしての「入念な準備」、そして選手はじめチーム全員の「メンタルコンディション」が充実していたからと考えている。準備についてはブラジル戦を目標とした綿密なスケジュール調整が挙げられる。特に時差と暑さの対策には時間をかけ、練習の時間、回数、練習試合、休息日等のスケジュールを監督以下スタッフ全員で相談し細かく決定した。また栄養面では、チームに栄養アドバイザーを帯同、現地での食材選定、購入、ホテル厨房との交渉にあたらせ、試合日にあわせて栄養内容を日本で食べられた味で提供できるよう努めた。この結果、初戦のブラジル戦に選手のコンドিশョンをベストに合わせることができ、「奇跡の勝利」をあげることができたのである。

ドクターの仕事

Y 「服部君の腰の具合はいかがでしょうか？」

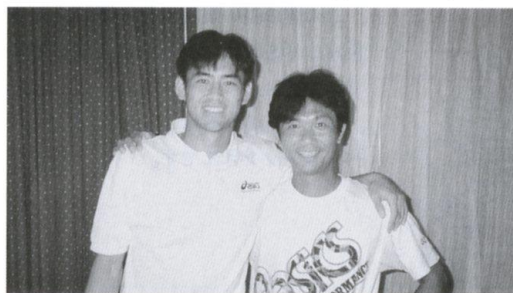
K 「腰の方は問題ないですが、最近左の足関節に……」

代表チームのドクターとしての仕事は、こんなやりとりで始まる。各チームのドクターと代表に選ばれた選手全員に身体状況を確認し、監督に報告する。怪我等、場合によってはこの結果、遠征メンバーからはずれることもあるわけで、ドクターとの連絡のみならず、本人の意思や、トレーナーの意見を確かめる等けっこう神経を使う。また持参する薬品、備品をチェックし、不足分は注文する。そうこうするうちにいざ出発。いったん成田を離陸したあとは私はヒマなのにしたことはないのだが、練習や試合での外傷は言うまでもなく虫歯、不眠、下痢、イビキ、歯ぎしりから恋愛相談に至るまで選手の皆様のあらゆるニーズにおこたえずべく、日夜ホテルのロビーの一室で奮闘する日々が続いた。

M君の膝痛

M君は連戦になると左膝の内側が痛みます。半月板の症例ではなくどうやら関節軟骨のすりへりによる痛みらしい。膝に注射（高齢者の膝痛：変形性関節症によく使うお薬）をうつと症状は著しく改善する。M君は小学校からサッカーを始め、高校時代は選手権大会で優勝の経験を持っている。練習はもちろん毎日で、一日四〜五時間以上の練習をこなし、試合に負けたときには点差によって罰のダッシュを科せられたこと。典型的な「甲子園症候群」の一症例である。甲子園症候群とは、高校の三年間という短期間で結果を出さねばならないため、練習時間はただただ長く練習内容はひたすらキツくなり、骨や関節に障害をきたす現象のことである。日本の高校レベルでは今でもなお技術よりも戦術よりもとにかく「走れば勝てる」のである。三十才を過ぎて引退間近な選手ならともかく二十才をそここの選手に軟骨障害とは言語道断、まさに「責任者出てこい！」である。西野監督も膝に持病のある選手など好きで使ったわけではない。しかし現段階では日本を代表する選手として使わざるを得なかったのだ。

もうひとつの困った問題は、「甲子園症候群」では下肢の軟骨病変のみならず「心」にも何ら



ホテルにて、川口能活選手と（写真右が柳田さん）

かの変化をきたしていることが多いことである。「何々しないと怒られる」式の指導を受けてきた選手は、プレッシャーがきつくなればなるほど高いモチベーションをキープできなくなる傾向があるようだ。このことは、タイトルのかかった国際試合では勝敗を左右する重要な問題である。だからといって学校体育型の部活動を否定するつもりはない。日本一になることを究極の目標とする指導者、選手、保護者がいてもそれはそれで良いと思う。が、しかし世界を目指すにはそれでは限界があることを今大会は教えてくれた。

エピソード

今年のオリンピックは、ブラジル、ハンガリーと強敵相手に二勝しながら決勝トナメントに進めないという不運な結果になってしまったが、日本サッカーがこの二十年間超えることのできなかつたアジアの壁をのりこえて世界にチャレンジしたこと、またそこで十分世界に通用する可能性を証明できたことは意義深い。

クレバーなりペロとして守備の要となった田中 誠はブラジル戦の前夜、こんなふうに僕に語った。

「ブラジル？おもいっきり（日本が）ディフェンシブになると思う。けど、うまさはレオナルド（元鹿島）とかでわかっている。レオが十人いると思えばいいんでしょ。だいじょうぶだよ。」

現在のJリーグのシステムは、ベストと言えないまでも、このように若い選手達に世界の一流のプレーを実感させた効果は大きい。また、世界をねらうには、学校体育型の指導では限界があり、選手が若いうちからその素質を見抜き、長い眼で成長の時期に応じたきめ細かな指導のできる社会体育型のJリーグ構想に大きな期待を持たたい。

若きJリーグの戦士達よ、力強くはばたけ！アジアへ、そして、世界へ。

筆者のプロフィール

昭和34年4月3日生

昭和47年3月 山崎小学校卒業

昭和53年3月 淳心学院高卒業

昭和61年3月 兵庫医科大学卒業

昭和61年5月 兵庫医大整形外科入局

以後高砂市民病院、公立御津病院等に勤務するかたわら平成2年より松下サッカークラブ（現ガンバ大阪）、U-19日本代表、日本五輪代表のチームドクターを勤める。平成8年3月よりガンバ大阪チームドクター（常勤）として現在に至る。

世界の図書館から

文学会 町 悦 子

ロヴァニエミ市立図書館

ロヴァニエミ市はフィンランドの北部にあり、約1km北へゆくと、もう北極圏になります。おそらく世界で最も北にある図書館でしょう。人口33,000人、木材搬出、皮革貿易、冬季スポーツの中心地。ロシアのペーチェンガに通じる極地ハイウェイの起点。空港あり。現在の図書館は市立図書館としてのみならず、ラップランドの地域中央図書館、フィンランドにおけるサーメ人（ノールウェー、スウェーデン、フィンランド、ロシアに分布する4万人の北方民族で、ラップランド地域には約3,800が住んでいる）の中央図書館の3つの機能を持っている。

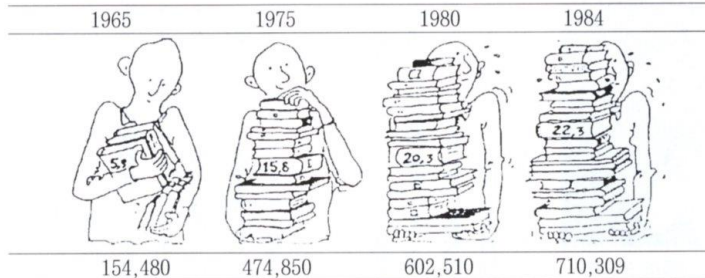


図書 430,000冊 定期刊行物 1,000点 AV資料 30,000点 貸出 770,000冊（人口1人当たり23冊／1年）

〈人口1人当たり貸出冊数の推移〉

この国の長い厳しい冬の間、人々は色々な本を読んで楽しく過しているのでしょうか。

ムーミンの作者はフィンランドのトーベ・ヤンソンさんです。



第十八回春の芸能祭ご案内

日時 平成九年五月十八日（日）

午前十時から

午後三時まで

場所 サンホールやまさき（山崎文化会館）

主催 サンホールやまさき（山崎文化会館）

後援 山崎町文化協会

後援 神戸新聞社・山崎町教育委員会

会員の日頃の練習の成果を、ぜひご覧くださいませよう、
ご案内申しあげます。

参加部門

- 山崎詩舞道連盟
- 山崎謡曲同好会
- 山崎郷土芸能保存会
- 山崎邦楽邦舞研究会
- さつき民踊グループ
- 播州山崎太鼓
- かしの学園
- （芸能祭実行委員会）

乃木將軍の金州城外の作

山崎詩舞道連盟 小 川 登

乃木將軍は口数の少ない謹厳な方であつただけに、將軍の胸中を窺うことは至難のことゝされてきました。然し乍ら、幸いな事に將軍は詩歌を能くされました。生涯に七千首の詩を詠まれたと言われています。其の中でも、最も多くの人々に愛され、親しまれた詩が「金州城外作」であると思ひます。

この詩は明治三十七年六月八日、長男勝典中尉の戦死の報に接した直後に、詠じられた詩であります。將軍は五月二十六日、第三軍司令官として東京を出発される際、静子夫人に「父子三典、同葬を

なすべし」と諭して、勇躍征途につかれました。長男勝典、次男保典、將軍希典、御三人は決して生還を期してはおられなかつた。死を以て皇国の鎮護にならんと、固く心に誓つて征途につかれたのです。

五月二十九日、広島に到着された將軍を待つていたのは、長男勝典中尉の戦死の悲報でありました。六月六日滿洲に上陸、同月八日勝典中尉の南山に於ける壮烈な戦いの跡を訪れて、無量の感慨をこめて作られたのがこの詩であります。

山川草木轉た荒涼 十里風腥し新戰場
征場前まず人語らず金州城外斜陽に立つ

山川草木轉た荒涼
十里風腥し新戰場
行馬不前人不語
金州城外斜陽に立つ
征場前まず人語らず
金州城外斜陽に立つ

「乃木將軍の金州城外の作の
軍事ハガキ」

御正斧の上、寧齋兄に示し被下度し。石林子とあります。正斧は添削の意、寧は静、齋は室、静子夫人の事と思ひます。石林は將軍が那須に隠棲された時の地名を雅号にされたものです。

馬上の將軍は数名の幕僚と共に、荒涼とした南山の中腹に立つて、戦没將士の墓前に、静に頭を垂れて黙祷されたのです。馬も又、馬上の人の心を察してか、嘶きの声もなく、暫し歩を留めて進もう

祭りのあと

播州山崎太鼓 志水昭彦

祭りの終わった後の空気が好きです。淋しさとか、けだるさとか。これから始まるという時よりも、終わった後の感じが好きです。播州山崎太鼓でも出演後に搬出をしていて、そういう心地良さを感じる時があります。

祭りばやし、鐘、笛、太鼓の音は、私達が幼い頃から父母と共に聞いてきた音です。

太鼓は、人間の喜び、憎しみ、怒り、そして愛などの感情をストレートに表現できる最も原始的な楽器のひとつですが、上手下手はあれ、たゆみなく打ち出されるものは、心と心を結ぶエネルギーだと

ともしない。幕僚等も皆、將軍の胸中を察して、声もなく涙を流すのでした。

蓋し、慈悲心の深い將軍は「王師百萬」の詩にもありますように、単に勝典中尉の冥福を祈るのでは無く、悠久の祖国を護る為、欣然として散華した、多くの將兵の上に想を致し、又、愛する夫を、子を失つた、父母兄弟の上に想を馳せ、万感交々、痛烈悲惨な心情を、詠まれたのが此の詩であります。

思っています。

太鼓を聞いていたら楽しくなつたとか、気分がすっきりしたとか、そんな話を耳にした事があります。でも叩いている方が、もっともっと気持ちがいいんです。

とにかく叩いて叩いて叩きまくり、全身全霊熱い思いをバチ先に込め、太鼓を叩くことで聴いて頂いている方々と私達の心が、ひとつになればと思っています。

この頃、若手の打手がどんどん入会してきますが、私達も彼等に、いろんな事を学び又、いろんな事を吸収してもらい、これからも心に残る感動を創っていきたいと思ひます。

将棋と右脳

山崎将棋同好会

杉元正輝

プロの野球界でイチロー選手の妙技が話題になりましたが、将棋界では七冠王を達成した羽生善治名人の活躍が、マスコミをにぎわせました。この二人の共通点は、知能をつかさどる左脳と、精神・情緒をつかさどる右脳の働きのバランスの良さが特長です。

ベストセラー書『脳内革命2』によると、右脳が脳全体の四分の三働いているのが、将棋の羽生名人であり、音楽家のシューベルトも右脳の使い手であるとされています。現代風にいえば、右脳によるシミュレーション（疑似体験）と左脳による論理的思考のバランスの良さが、敗着の一手（ポカ）をなくすゆえんなのでしよう。

将棋は一局平均百二十手ですが先手後手各五手（計十手）の局面が十二回続くことを想定（右脳）して、それぞれに、三手の読み（左脳）を入れて指しますがこの三手の読みも、序盤、中盤、終盤によって考え方が 変わるといふところに、将棋の楽しさと、奥の深さがあります。

序盤は駒組み（囲い）と攻めの体制であり、一步の損（二歩差）もおろそかにできません。中盤は歩の突きすてから始まりませんが、その後の駒（遊び駒）の活用が優劣を決することになります。終盤は詰め駒の確保と敵玉との接近戦となり、小駒の方が大駒（飛車・角）より大事となる局面がしばしば現れます。

右脳を存分に働かす方法は①睡眠②軽度な運動③瞑想の三つが大事なことで、職場の企業戦士達よ深酒でストレスを解消したりせず、軽い体操と縁台将棋の醍醐味で疲れをふっ飛ばしましょう。また、塾帰りの少年・少女もスポーツとへボ将棋の楽しさを味わって頂きたいものです。

NHKの朝の連続テレビ「ふたりっ子」の人氣は好調です。花の女子大生の麗子と、将棋一直線（棒銀）で女性棋士を目指す香子の双子の姉妹のドラマですが、とても人生を示唆していて、楽しく見えます。

かく言う私はアマ将棋実力初段（地区大会C級優勝）で、楽しさ百倍、苦しさ十倍ですが、近未来はアマ高段者（達人）を目指しております。

将棋に限らず、何か趣味を見つけて、続けてゆくことが左脳（知能）と右脳（精神・情緒）をフルに働かせることと確信しています。

もうすぐ百回目を迎える観察会

植物同好会理事（広報担当） 井口武一

植物同好会は、草花や昆虫や野鳥が好きで好きでたまらない者の集まりです。会員は、月一回、胸をわくわくさせながら集まって来ます。

世界に種子植物が二十万種、昆虫は日本だけでも十萬種もあるそうですから、植物や昆虫については分らないことがいっぱいあります。野外での観察や採集は科学的な見方や考え方が身につくばかりでなく、自然の中にかくされている秘密を解き明かす楽しみがあります。

草花を観察したり虫を採集するにあたっては、その名前が分からないと興味は半減します。そこで、先ず名前をおぼえることから学習します。県立昆虫館の内海館長、県立林業技術センターの樹木にくわしい古池研究部長、マツタケ研究で有名な鳥越研究主任の先生方はあらゆる質問に答えて下さいます。時には外部からも専門の講師を迎えています。植物や昆虫、野鳥について諸々の知識が得られ広い世界が開けます。

去る十一月三日、本年度最終の観察会で、千種町鍋ヶ谷の紅葉を見に行きました。第九十五回目にあたります。

今年の観察会での特筆事項は、この夏

八月二日に大型バス二台を連ねて念願の伊吹山登山に挑んだことです。私たち参加者全員は高山植物の群落、お花畑の前に感嘆のため息をつきました。キンバイソウやシモツケソウの黄色やピンク、それにクガイソウの穂の青紫、今でも眼前にその情景がうかびます。写真はその時、山頂で撮った記念すべきものです。回を重ねて観察会は、もうすぐ百回目を迎えます。楽しい集い、楽しい語り、これからも草花を愛し、虫を愛する者どもは、月に一度一堂に会し、地道な学習を続けていきたいと思っています。



町民合唱のこのころ

山崎町民合唱団代表

藤井七代

この秋の活動を記しますと、昨年町民合唱もヤマサキクワイヤーの一員としてスクイムを訪問させて頂いた関係もあり、親善交流で来町されたスクイム市民とのふれあいが多いようです。

一、十一月二日 午後一時より

於 ジャスコ 中央広場

ジャスコを中心としての日米交流の集いに参加。会場ではお互いに知人もありジュエスチャー入りのご挨拶が、そこかしこで見受けられました。演奏のトップは山崎西中吹奏楽部。その筋で金賞を受けられたのも「宜なるかな」。来春訪米予定の児童合唱団。大阪より特に来町のハワイアンバンドの演奏に最高潮。米国側は、男子中学生のギター演奏。女子中学生の宗教的な手話の歌。ふしぎの国のアリスと青虫との対話寸劇。早口の英会話には全くお手上げ…。でも扮装共々にムードを十分楽しませて頂きました。町民合唱はYOBとバラエティソングを数曲。閉会後は双方それぞれにジャスコ店内にて、喫茶、お買物を楽しまれました。

二、十一月三日 午前十時より

於 山崎文化会館 サンホール

秋のふれあい音楽祭、山崎文化協会所属の芸術、芸能団体のすばらしい集大成の中で歌は短い方がベストかも…。と「シャルウイダンス」さあ！ダンスを踊りましょう。リズムカルに、優美に、ほほえみを忘れず。と全員申し合わせをしてステージへ。本番はどうなりましたやら。

三、十一月五日 午後六時より

於 レストラン ダヴィンチ

スクイム市民の来日中、滞在を引き受けられた御家族が中心での四十余名の会員制パーティーに町民合唱も急遽参加となり、藤井、千田、伊藤、谷林諸氏の持ち込み楽器による演奏、伴奏にて全員熱唱。スクイム小学校シュディローン先生も歯科医のリチャードデビス先生もギターを手に熱演されました。ダヴィンチ会場の素敵な佇まいに加え、ご馳走、ドリンク類に恵まれて和気あいの雰囲気にも包まれ楽しい夜の集いでした。ペルトカンブさんの日本語の挨拶に終わりを告げ「シーユアゲイン」「サンキュー」を口々に時雨の中、名残り惜しみつつ、散会しました。

全ての行事に参加された訪問団長のシリー先生は山崎町民の文化レベルは非常に高いものです、との事でした。

絵とらららら

美術協会 福岡久藏

九十才を過ぎてなお現場へ出向き、バリエーションを描き続けておられた画家の中川一政氏が『いのち弾ける』という本の中で次のようなことを言われています。

「何人かが寄って絵を審査する時に、きたない絵がでてくると、きまって美術だもの、美しくなくてはだめだね」と批評する審査員の声を聞く。しかし、私は関係ないと思っている。美しく整って死んでいる絵より、きたなくてもいい生き生きと作者の息づかいが感じられる方が良い。」と。また「絵は美術でなく、生術といった方が良いと心の奥で常々思っている」とも。

これ等の言葉から、私は中川氏の絵に對する心意気が脈脈と伝わってくるようにおもいます。だからこそ彼が絵を描くことに燃焼し尽くせたのだとも思います。考えてみると、本来絵というものは描こうとする対象物そのものをいかに上手に写し取るかという技術の確かさの表現ではなく、対象物そのものから作者に伝わってくる詩や感動や驚きを感じたままに描くことなのです。だから絵を描くことは楽しくて仕方がないはずですし、次から次へといくらでも絵が描けなければならぬのです。

ところが、今の私自身はどうでしょう。まるで迷路の中を彷徨っているようなのです。

いざ絵を描こうとすると、どこから描こうか。どこを描こうかと先ず迷う。近景や中景、遠景をどう組み入れようか。絵の中心や目の位置をどうしようかなど構図のことで迷う。なんとかクリヤーして形ができる。次は配色で迷う。暖色系でか、寒色系でか、何色でまとめようかとまた迷う。ポイントには何色を置こうか、それはどの位置にしようかなど迷うことばかりが次から次へと出てくる、作品の完成をみるのがないまま時間ばかりがどんどん過ぎていくのです。

私だって海へ行けば海の、山には山の良さやすばらしさは分かるのです。春はパステルカラーの若葉のやわらかさや、夏には繁った木々の力強さや、秋は紅葉の織りなす色のシンホニーや、冬は自然の厳しさ等、四季折々の美しさに感動できるつもりでいるのです。でも、いざ描こうとすると迷うばかりなのです。絵は結果でなく過程なのです。だから見栄を張らず、気取らず、素直に自分の感じを表現したいものと思っています。

秋のふれあい文化祭を終えて

山崎児童合唱団 塚田美紀

山々の紅葉も深まり、穴栗が一番、美しい季節を迎えた先日、秋のふれあい文化祭に参加させていただきました。今年度は、少し背伸びをして、難しい曲に挑戦しました。秋は行事が多く、文化祭当日も他の行事と重なり、高学年が、欠けてしまう舞台となり、直前の練習まで指導スタッフをハラハラさせる状態でしたが本番では、みちがえるほど上手に歌うことができました。今年の入団生にとっては、サンホールでの初舞台でした。他の町のホール等では何度か歌い、舞台なれをしているとは思っていましたが、知っている地域の人の前で歌うのは良い意味での緊張や、ガンバリができたのでしょうか。歌い終って真赤になったほっぺ、きらきらした瞳で「なんか、みんなの声が一つになったんや。気持ちよかった。感動してよかった。」と二年生の団員の感想。

団員達のこの生き生きした顔、心に私達スタッフは支えられ、次の練習からもっともっとなんばろうという力がわいてきます。このキラキラした瞳がいつまでも続くように、また、一人でも多くの子供たちの瞳も合唱を通して輝やかせてあげたいという願いで日々、指導にあたらせて

草土千軒は、広島県福山市の西郊、芦田川の川底に埋もれた中世の集落跡です。中世の瀬戸内に栄えた港町へタイムスリップして訪れてみましょう。

時は今から六百年前の南北朝の時代でありました。頃は初夏のたそがれ時です。西の空に薄雲にかすんだ夕陽が沈みかけています。十数軒群った村へ足を踏み入れました。かたわらの小川の岸辺に葦や雑草が群がって生えております。米俵を積んだ小舟が鵜と

竿を舟に引き上げ、舳先を少しばかり岸にのりあげつないであります。その向こうに道をはさんで両側に小さな長屋が建っています。入口手前の

草土千軒

山崎郷土研究会

岸本正理

左側に麦藁屋根の小屋があり、物置になっております。家々は、杉皮葺きで、風にとばされないように一抱えぐらいの石がてんでんと置いてあります。窓は、板張りの戸を押し上げると窓になり下ろすと壁になって戸締まりができるようになって

あります。

一軒の家へ狭い入口を入ると、そこはおわんに黒塗りの漆をほどこす職人の家でした。棚にお碗が十数個並べてありました。

つぎに隣の家をのぞくと、そこは下駄を作る職人の家でした。部屋の中いろいろが切ってあって炭火が赤いこつていました。その回りに黒塗りの脚のないお膳が三個並べてあり、鯛のお頭つきに鯖の酢のもの、蛤のおすまし、煮物にごはんと漬物、けっこうご馳走です。何かのお祝いの膳でしょう。床は茅で編んだ敷物がしいてあり、その上にむしろがしいてありました。わらの円形の座ぶとんが置いてありました。

外へ出ると茅葺き屋根で観音開きの堂が正面に建っていました。中をのぞくと木造の地藏菩薩像が安置されていました。そこから出ると外はもう二十世紀の世界でした。草土千軒は、室町時代を見事にリアルに再現してみせてくれました。

外へ出ると茅葺き屋根で観音開きの堂が正面に建っていました。中をのぞくと木造の地藏菩薩像が安置されていました。そこから出ると外はもう二十世紀の世界でした。草土千軒は、室町時代を見事にリアルに再現してみせてくれました。

外へ出ると茅葺き屋根で観音開きの堂が正面に建っていました。中をのぞくと木造の地藏菩薩像が安置されていました。そこから出ると外はもう二十世紀の世界でした。草土千軒は、室町時代を見事にリアルに再現してみせてくれました。

外へ出ると茅葺き屋根で観音開きの堂が正面に建っていました。中をのぞくと木造の地藏菩薩像が安置されていました。そこから出ると外はもう二十世紀の世界でした。草土千軒は、室町時代を見事にリアルに再現してみせてくれました。

さつき祭の今後について想う

播磨さつき会 金井信治

昭和三十五年第一回さつき展が開催されてより今年で第三十七回を数えます。(第十二回よりさつき祭と改称)

さつき祭の全盛期には会員数も多く、展示するにしても即売するにしても規制をしなければならぬ状態でありました。

見物客も三日間で約二十万人とか報道され、たいへんな賑わいでありました。

回を重ねる毎に見物客も減り、現在は五万人とか六万人とかいわれるようになりました。さつきの人気が下降したのも事実ですが、二十年前に比べると近隣に展示会場が増した事もその一因であると思います。

さつき作りは本当に楽な事ではありません。趣味であるからよいようなもの金はかかるし、それに伴う利は少ないとあっては、会員が減少するもあたりまえの事と思います。さつきの町山崎と看板を掲げた以上止められもせずといつて今役場のOBである我々四、五名がさつき作りを止めてしまえばどうなることやら。

さつき祭の展示については最近公募を

されているようです。阪神方面から費用をかけて展示に来てくださる方があればよいのですがそれ程の魅力もなく国風展程の權威もないとなるとこの先はどうなる事やら。今後の課題として後継者の育成を急がねばならないと考えますが、はたして前述のようにしんどい作業なればあるかどうか、祭のあり方も一考を要するのではないのでしょうか。私達役場のOBは年令も七十才を越え残りの人生も僅かとなっていきます。ここで一つ町花に選定された当時を思い町当局も力を入れてもらわねばと存じます。聞くところによると町花さつき普及振興会は、廃止されたとか。これは安井町長当時町議会に於いての一般質問による答弁により設立されたものであり、そう簡単に廃止されるものではないと存じます。

今後さつきの町としてさつき祭を継続するとすれば町当局の一層の力添えを願うものです。

雑感

新潮会

藤井正己

人にはやさしい思いやりの気持で接することは、人として当然になすべきことではないでしょうか。しかし、それが権利意識が強くなっているせいか自分だけがよければ相手はどうなってもよいといった、いわば相手のことを全く考えないで、物を言う人があります。例えば夏休みになりますと、毎年子ども会の行事として朝のラジオ体操がありますが、そのときのテープの再生音のことでしょうか、や

かましいのでラジオ体操を止めてほしいと言う人があるかと思うと、狭い道を車で通っていたら、この門先はうちの土地やで通らんとってと言われて、引き返したという人もあります。

夏休みのラジオ体操といえば全国的に行われていることで、私達の町でもお寺の境内や駐車場のような広いところで子ども達に大人も加わってやっておられるのを見ましたが、そうやかましいとは思いませんでしたし、時間にしても十分程の短いもので、子ども達が夏休みの行事として参加しているものですから、止めてしまうというのではどうかと思います。また、私有地の通行については、前

記のような人とは反対に、道幅の狭いところをお互いが土地を出し合って、通りやすくしておられるところや、人によっては自分の宅地を減らしてまで、隣の人の車の出入りのことを考えて、ブロック塀を後ろに引いておられる家や、狭い道路の三叉路のところでも、隣の人の車の転回のことを考えて、角切りを深くする等のやさしい人もあります。

昔から向こう三軒両隣とか、遠くの親類より近くの他人という諺があります。これは、隣近所はふだんから仲良くしなさい、いざというときに一番お世話になるのは遠くに住んでいる肉親よりも近くに住んでいる人ですよの意味だと思えます。昨年の阪神淡路大震災で当時神戸市灘区に住んでいた友人が倒壊家屋の下敷きになり、身動きできないところを隣の倒壊家屋の下から自力で脱出した青年に数時間ぶりに救出されたと聞きました。

当時はこのように瓦礫の下などから救出された人は数多くあります。これには自衛隊、警察等の昼夜を分たぬ救出活動のお蔭であったことは周知のとおりですが、その活動の前から既に近隣の人達による懸命の救出がなされていたことを忘れてはなりません。ですからこの教訓からも日頃から身近な隣近所の心のふれあい、助け合いがいかに大切であるかを痛感する次第です。

秋のふれあい文化祭 に参加して

山崎邦楽邦舞研究会

井口定子

「おつかれさま、がんばりよってやね。」
観客席で見ていた友達が廊下で声をかけてくれました。

「舞踊してる者の特権やね、あんな派手な着物が着られて。」

「ボケてる暇ないね、あれだけ体を動かしてたら。」自分と同年令の友達なもので、遠慮のない感想が次々と口をついて出て来ます。

ふれあい文化祭、度々参加させて戴いておりますが、年々の盛り上がり、ふり落とされないようにと、必死で自分なりにがんばっているのです。

本当に出演の方々、みんな生き生きとして若やいで輝いておられます。

そのがんばろうとする心、練習がみんなをこんなにも生き生きと、明るくさせているのでしょうか。

一生けんめい太鼓を打った若者達がブルブル汗で入って来ました。その笑顔のなんと晴れやかで美しいこと。私の烏帽子をそっとおしてくれた女の子。このふれあいの中で、お互いが高まり合っているのだと、何か感傷的な気分になりな

がら、私もがんばらなくてはと、大きく呼吸をしてステージへと向かいました。

何か趣味を持ちたいと始めた日舞ですが、なかなか思う様に体が動かず、一向に上達しませんが、

「ここは、こんな風になると、趣きが出てくるんですよ。」と、手本を示して下さる師匠、もう大分お年を重ねておられるのに、その動作一つ一つに不思議な色気さえ感じられる師匠の舞、私も何とかしてその百分の一でも感じが出せたらと舞踊への意欲がわいて来るのです。

この舞踊も、もう生活の一部とさえなり、私のくらしのうらおいとなってくれています。仲間も、もうまるっきり兄弟姉妹となってしまう、遠慮のない話し合いの中で助け合っているのです。あれだけけいこにきびしい師匠も、

「ありがとうございます。」

「はい、おつかれさま。」と、そのトタンやさしいお母さん、お姉さんに早変わり、なごやかな話し合いになっていきます。

こんな中で互いに育て合った私達が、ふれあい文化祭に参加させてもらい、その中で、育てて戴いて、本当に年令を忘れ、つかれを忘れ、なやみを忘れて、お互いを温め合い、はげまし合った文化祭に心から感謝しながら会場をあとにしたのです。

随

想

昭和会 中川 博夫

「星のように急がず、しかも休まず」

とうとう古稀が目前に迫った。なんと多くのものが過ぎてゆき、なくなってしまうことだろう。しかし本当に取り返しつかない喪失とは、意欲の喪失である。年をかさねてそういう取り返しのかめ状態に一步一步踏みこんでいるように思うこのごろである。そんな中で、談話会や旅行会などで顔を合わせ、友情を確かめあって束の間の安息を得ることのできる昭和会の行事は、本当に人生の一刻の休戦である。会長はそのラッパ手のようなものであろう。何も新しい知識や教訓を得ることが目的ではない。それぞれのもつ社会生活の緊張から離れて、ひととき自分を取り戻す、そんな昭和会でありたい。あ、葉や はだかの昼寝

はの部屋” (石坂泰三)

本年は一月に山崎町長上木茂志様が入会して下され、会員一同心からお喜びした次第である。

二月例会では、本條衛会員が外遊漫談をされた。「ちりを調べよ世界の地理を、島嶼根性をやめにして」(前野道素翁・最上山麓碑)を前置きに、約二十ヶ国の寸描を話されたが、日々シレーンには中

国に押さえられている。平和国家スイスは、大学で二年の兵役義務があり、国民全部に地下壕がある。日本の抽象的反戦平和といかに違うことか。タイでは、小

学生が国歌を唱いながら下校する。わが国では国旗も掲げない。そしてアメリカの青年が日本を守っているとの御指摘は肺腑にひびいた。三月には阪大名誉教授勝部博士(元藤元歯科、庚さん夫君)に生命体の増殖維持の主役たんぱく質の働きについてお話をきいた。六月には神話の里出雲への観光旅行を行った。

四月と九月は筆者の畏友で、古談、伝説に精通している津田欣一氏に「佛様の世界」お化けと幽霊」という題で、如来、菩薩、御霊信仰、地獄思想などを軸に興味津々たるお話をいただいた。

十月には山崎警察署長水嶋英明氏より警察のお仕事について御懇切なお話を賜りました。特に交通問題については、眼を開かれる思いがした。行政も町民も一層の努力をするべきと考えさせられた。

来年は昭和会も四十周年を迎えることになる。いよいよ深くこの町を愛し人生を実感し、愛おしんで行く会であるよう願っています。

川戸獅子舞の沿革

山崎郷土芸能保存会 原 忠 雄

秋の収穫も間近になりますと稲穂を渡る風波に乗ってどこからともなく太鼓、笛の音が聞こえて来る事はほんとうに楽しいものです。当川戸地区にも伝統ある獅子舞が毎年十月十日の祭日に保存会有志により奉納されています。この川戸獅子舞の歴史を改めて紹介させて頂きました。

川戸大歳神社獅子神楽として一六二〇年元和五年頃よりの始まりとなって居ります。その頃全国的に大凶作、風水害等で餓死者が多数続出、山崎藩本多家崇敬厚き神社として部落農民の家内安全、五穀豊饒を祈る獅子神楽を春は五月、秋は十月の祭礼時に奉納祈願する様になったと伝えられています。代々氏子により受け継がれ、奉納されていましたが、明治四十二年無格社岩田神社となり神社獅子神楽として昭和十八年まで続き、第二次大戦に入り、男子不在ともなり永く続いた獅子舞も出来なくなりましたが奉納神楽だけは「ずー」と受け継がれて来ました。

戦後、時代の流れと共に敬神の心もわずか若い人達も少なく昭和四十四年まで中止となって居たが、戦後生まれの青年ら若い層もだんだん成長し、伝統ある獅

子舞の復活をしてはどうかと青壮年が中心となり現在ある保存会へと発展したのであります。

奉納種目としては、剣の舞、八島の舞、さんぎりの舞、ほら返し舞、油引の舞、道引の舞、まるさんの舞、子供つぎの舞以上八種の舞を奉納して居ります。舞にはそれぞれ意味が含まれて居りますが今回は省略させて頂きます。なお川戸獅子舞は子供が多数出演致しますので総人員は五十名程の人員が最低必要となっております。



今迄町内外へイベント参加も多々させて頂き、お世話になりました事紙上をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

運動にはダンベル体操、水泳、氣功術：と色々あるが歩く事も嫌いでないし、まづてっとり早く早朝歩くことで体調を整えることが出来ればと決心した。歩いてみると今まで見過ごしてきたものが目に止まる。世の中のさまざまな社会現象も観察できるし、ある時はアイデアがわいてくることもある。自然の移り変わりも楽しく、花の香り、鳥の鳴き声、耳をすませば落葉の音も聞こえる。軒先から匂っ

私の健康法

平成会会長

高井 國 昭

「健康」という事について人それぞれ関心度が違うと思うが、私の場合毎日晩酌シタバコを吸い、身体にとって悪影響を及ぼす事はかりをしてきた。若い時は考えもしなかったが年令と共に健康という事に関心を持ち始めた。ある事がきっかけでタバコを休憩(?)したが世間の噂どおり体重が増えてきた。この状態では元気で楽しい毎日を送る事が出来ない。病氣は健康になる為の赤信号、不幸になる為のものではなく幸福への道のりである。成人病は生活病、と何かの本で見た事がある。

運動にはダンベル体操、水泳、氣功術：と色々あるが歩く事も嫌いでないし、まづてっとり早く早朝歩くことで体調を整えることが出来ればと決心した。歩いてみると今まで見過ごしてきたものが目に止まる。世の中のさまざまな社会現象も観察できるし、ある時はアイデアがわいてくることもある。自然の移り変わりも楽しく、花の香り、鳥の鳴き声、耳をすませば落葉の音も聞こえる。軒先から匂っ

てくるみそ汁のにおい、コーヒーの香り等。その場所、ところによる変化が楽しみだ。これも朝のゆっくりとした気分と車にはない遅いスピードが気づかせてくれるものだと感謝している。又自然だけではなく人との出会いもある。家を出る時は一人だが五分程で一人増え十五分過ぎに又一人、と同じ顔触れが揃う。道すがら神社、お寺で拝礼し雑談しながら又犬を散歩させている人、詩吟の練習の人達。静かな中にも朝の冷気と共にキューと身が引きしまり掌に力がこもる。いつも出会う人に出会わないと風邪だろうかそれとも旅行だろうかと色々思いめぐらしながらの一時間余りの道のりを歩く。

最近では体重も減り、何か身体の調子も良いような気もする。あとは酒を飲む習慣がついているので他人からの誘いだけではなく自分の欲求をどうコントロールするかも大きな問題だ。歩くことは誰にでも出来る運動だが、誰にでもできるから長続きしないようにも思える。歩き初めて九年、タバコも休憩のまま現在に至っている。今後何日、何年続くか分からないが、自分の健康法として歩くことを続けたいと思っている。

囲碁同好会 尾崎正一

「余白」 書作で「白い所も物を言う」と申します。書かれていない所も作品の役目をしていると云うか、いやむしろ作品は「余白」という働きを内に蔵しているというべきでしょう。濃厚を止揚した

「淡泊」、複雑を高めた「簡素」を内蔵した「平凡」等反対要素を否定的に媒介して高める良さであって、どの芸能にも重要な役割を果たしている。

「間を置く」「間」は微妙な役割を持っており、「間を置く」「間を取る」「間合い」などと申して適期を追究する一種「勘」ともいべきもので、「余白」に深く関わっております。きびしい鍛練によって達せられる極意というべきでしょう。

「習気」 書作では習気ということをお申します。習えば習うほど上達はするが一種の嫌味が出て来ることです。繰り返してゆくうちに型が固定化し俗っぽくなり、感動や生彩が衰えるということでもあります。世事に「普く及べば俗となる」と申します。広くゆき巨ると草創の精衰えてありふれて来る。形式化して初心が失われる。

葉根譚の一節に「ま当に初心を原もとめべし」ということがありますが、繰り返すことによってもゆき巨ることによっても「俗」が待ち受けているということに心すべきでありましょう。

山崎町かしの学園に囲碁クラブ新設。この度山崎町かしの学園（老大）に囲碁クラブが発足しました。囲碁を楽しむ人々からの強い要望によって生まれたものです。

その趣旨は
一、老大の目的に従って広く一般教養の研修をたかめる。
二、囲碁の部活動を通じて高齢者の交流を図り親睦を深める。

三、高齢者の生き甲斐と活力をたかめる。
○ 勝敗にこだわらず囲碁を楽しみ棋力を磨く。

○ 手合いの段級は自己申告とし年数回の囲碁大会を開く。
○ 一般教養日の午後講師を迎え研修を行う。

○ 会場は社会福祉老人センターを拝借する。

というもので五月より研修に入っております。全会員は今のところ二十四名で毎回多数の出席を見ております。女性も数名加わってもらっており、又初めて石



分相応に

山崎茶華道協会 笹木弥生

私は四十才の半ばの頃、思い立って師の門を叩いた。茶の道を学ぶという高邁な心ではなく只老後の楽しみになればという漠然とした気持ちからだったと思う。若い人とは違い、稽古はなかなか順調には進まない。歩く事一つにしても意識してきこえない動きになってしまふ。自然に——と云うことの何とむずかしい事か。復習するにも道具はなく、釜一つ、茶碗一つの出発であった。夜、床についてからイメージトレーニングというか、頭の中で帛紗をさばき、茶筌通しをして茶を点てる。

元来私は不器用な方で、すべてに出来が悪かった。元町長の井口さんは私の事を「兄弟姉妹中の出来そこない」と評されていた。残念ながらその通りである。小学校の頃から「兄さんは偉かった」「姉さんはきれいだった」と何度いわれた事か。閑話休題。不肖の弟子であるが、

を握られる方もおられて皆楽しく仲よく最後の活力を養っております。これから多数の御参加をお待ちしております。

稽古場は掛物から花入れ、茶道具全一流のものを使用させてもらった。鑑賞する目を養い、道具を大切に扱うことも教えられた。道具といえは初めて宝塚在住の名工の作品展に行った時、その精巧で整った美しさに感じてしばし立ちつくしてしまつた。ふと正価を見ておどろいた。私にはとても考えられない価格であった。これは大変な世界だ、我々ごときの入れる道ではないと複雑な気持ちになってしまった。あれこれ悩み、つまずきながらもそのうち私は私なりに「分相応に」ということが理解出来て徐々に心も落ち着いてきたことであつた。

「お茶の道信じ、お茶を愛して下さい。そして一盃からすべての平和と幸せが来る様に祈ってお茶に励んで下さい」との家元のお言葉をひたすら信じ、ただどしく歩みを続けたいと思う此の頃であります。

あります。

芸能文化の 継承に思う

山崎謡曲同好会
伊野 操 治

世の中には、「古代文化」といわれるものの中に芸能文化として古くから継承されたものが多い。この山崎町にもその慣らしを引き継ぎ、数多い郷土芸能、芸能文化を嗜まれる方が大勢いらっしゃいます。

ついこの間の「第六回秋のふれあい文化祭」では、そういった方々による演技が披露され、とても素晴らしい盛況の会場でした。私も謡曲同好会の一員として当日の準備等のお手伝いという事でも出役させて頂いたこと。喜ばしいことに参加される団体は年々増加の傾向で、今年は二十四団体の参加があり、事務担当「進行係」は時間調整に大わらわ……といったところでした。驚いたことにこれ程大勢出演される中で、男性の出演と言えば一割にも満たず、殆ど女性ということ。勿論踊りと言えば女性と当然の如くには思えるのですが、男性としては些か淋しい思いを致しました。

そんな思いの中、若い方々による「播州山崎太鼓」昨年に続いて若い衆の威勢のよい太鼓の音に観客は引き込まれた様子でした。その後も次々と素晴らしい内容でプログラムは進行、掉尾を飾る演技では盆踊り保存会による「シャントコ踊り」と続いた。「郷土芸能」塩田保存会の皆様による餅の千本搦ぎが披露され、何れも大いに盛り上がり、「シャントコ踊り」では、スクイム交流団の方々と交じり国際色豊かな中に終了、主催者・出演者ともに大満足であったことは間違いありません。

ところで、山崎町の、いや宍粟郡、広くは播磨の盆踊りと言えば伝統あるもので、遠く江戸時代より一般庶民に親しまれ殊に農民の間では先祖の供養として、お盆には先祖を迎え盆踊りを楽しんだと聞いております。私のこどもの頃には大人も子供も皆んな一緒に各村落において随所で行われていた記憶があります。また、踊りには「シャントコ」「左エ門」「夜川」「ぼんさん」踊りとそれぞれの特徴を持ち、その意味を表現しようと工夫され、江戸時代に於ける近世文化の名残りが伺えます。

この様な古くからの伝統を我々現代に生きる者が、それぞれの地域に於いて大切に、歪めることなく正しく継承して行くことを忘れてはならないと思います。

踊りと言えば、小さい頃より盆踊りしか頭になかったこの私が、四年程前になるのでしょうか、郡民病院前のお母さんこと西川慶子さんに誘われて、嬉し恥ずかしい初舞台を踊ったのを思い出します。その日は、黒い顔に白いおしろい等をつけて、近くでは見たくないというより見られない顔で、出番が近づくとつれて、緊張感と胸の動悸で、自分自身わからない内に気が付くと終わっていました。これが私の四十過ぎてのなつかしい初体験なのです。後で私のその踊りを見ていた人が、こんな事を言ってくれました。

「踊りの出会い」

山崎さつき民謡グループ
助光 梅代

では表現出来ませんが姿や、形も踊りにとって本当に大切であるが、一番は自分の心であると言うことを、先生の踊りの中で感じるようになったこと。

その時に踊った顔の表情が大切なんだなあとつくづく思い知らされました。又平成四年より、岸本幸子（坂東寿賀幸）先生との縁を頂きまして、さつき民踊りグループの一員として、山崎町芸能祭、老人センター山崎祭、敬老会、むつみ園等へのボランティア活動を皆様と共に頑張らして奉仕しています。

人様の前で踊るといふ事は、本当に大変です。踊る時間等は、数分ですが何回も何回も当日を迎えるために練習をしても、不安な気持ちでいっぱいの時もあります。表に出て踊る人、裏方の人、そん

な人達があって私達も踊れるのです。泣いたり、怒ったり、笑ったりしながら私の踊りの人生ですが、盆踊りしか出来なかったこの私が、チョッピリ前進出来たようで嬉しく思っております。踊りとは全く縁がないと思っていたのに……。私達の先生である岸本幸子（坂東寿賀幸）先生の、素晴らしい踊りに酔いつつ、心ひそかに岸本先生のような踊りが出来るのを夢見ている今日この頃の私です。そして岸本先生の踊りの中で一つ学んだ事があります。それは、言葉等では表現出来ませんが姿や、形も踊りにとって本当に大切であるが、一番は自分の心であると言うことを、先生の踊りの中で感じるようになったこと。

踊りは、自分自身の心が、100%表に出てしまふから奇麗な気持ちで踊らないと、見ている人達にいやな感じを与えてしまいます。そうした点で岸本先生って本当にすごいと思いました。練習日も、仲々参加出来ない私ですが、岸本先生の暖かいご指導の元で、皆さんで楽しく笑顔で、頑張っていこうと思っております。踊りを通じて色々な人達との出逢いがあります。この縁を大切に、ボランティア活動にも頑張っていきたいと思っております。よろしくお願ひします。

事務局便り

☆最上山に「文化のこみち」づくり

文化協会は新しい事業として、山崎町中心部の脊山、最上山ふれあいの森公園内に「文化のこみち」をつくる計画をすすめている。町当局との話し合いの上、同公園内の「千畳敷」「百畳敷」付近を縫う遊歩道の側面に歌碑、句碑、石彫などをたて、町の人たちにより一層、親しんでもらえる公園にしようというもの。

第一回最上山公園「文化のこみち」創造推進委員会は十一月二十六日、町役場で開かれ、文化協会正副会長、歌人協会、俳句協会、美術協会、町当局、町教委代表の委員約二十人が出席。規約を審議決定。顧問に壺阪壽氏、会長に荒木俊介氏、副会長に長川耕一氏を選任した。今後は同委員会が中心になって細部にわたる具体的な計画を練り、実行に移す考え。

☆「ワンダフル」を連発

第六回やまさき秋のふれあい文化祭は十一月三日山崎文化会館で開かれた。山崎町内の芸能関係団体の人たちが出演。日頃から練習を重ねてきた成果を発表した。今回は塩田地区の人たちによる伝統芸能「千本搦」が披露されるなど大いに観客を楽しませた。会場には同町の姉妹都市、アメリカ・ワシントン州・スタイム市の人たちが十二人も姿を見せ、見事な熱演ぶりに「ワンダフル」を連発していた。

編集後記

編集長 荒木俊介

「やまさき文化」第十六号を発刊します。毎回のことですが、今回も各文化団体から貴重な記録や随想をお寄せ頂き、有難うございました。又、これからも活動状況などを写した写真がありましたらお寄せ下さい。掲載して内容の充実をはかりたいと思っております。

コラム欄には、皆様もよくご存知の現在、香川短期大学学長になっておられます北川博敏先生と「ガンバ大阪」チームドクター柳田博美先生のお二人に登場願いました。大変興味深いお話を有難うございました。誌上をかりて厚くお礼を申し上げます。

創作では、戦国の世の高名にまつわる話を中心に描いて、高名という華々しい美名の裏に隠された武辺者と呼ばれた武士達の実態に迫ってみました。極めて信憑性の高い史書をもとに描いておりますので読後、彼等の深層心理を夫々に思い描いて頂ければ小説の面白さも倍加するのではないかと思います。

表紙並びにカットの絵は、もう皆様に華麗なタッチでお馴染みの福岡久蔵先生に誌面を飾って頂きました。厚くお礼を申し上げます。

OA機器・事務用品・スチール家具
学校設備品・理化学機器・楽器



イトーオフィスサービス株式会社

代表取締役 伊藤和久

山崎町中広瀬117-12 TEL (0790) 62-0126

創業明治28年・さつき本舗

四季の菓子

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を

御菓子司 くらき

本店：播州山崎町さつき通り (電) 0790-62-0170
山田店：播州山崎町山田 (電) 0790-62-0160
福崎店：播州福崎町辻川 (電) 0790-22-7555



飛石機械産業からのお願い

人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」を生活信条に、自作自演で30数年を歩いて参りました。昭和46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答える為に、人としての使命感に燃え、それを無限のエネルギーとして全社掲げて取組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければと申し上げており、流通の世界の中で生活文化の向上を願い、多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

TOBIISHI

飛石機械産業株式会社
TOBIISHI KIKAI SANGYO CO., LTD.
〒700-0001 岡山県岡山市東区山崎1-1-1 TEL(0790)62-1700
飛石機械 岡山店 TEL(0790)62-1700
飛石機械 山崎店 TEL(0790)62-1700
トビイシ経理 岡山店 TEL(0790)62-3610
トビイシ経理 山崎店 TEL(0790)62-3610
CREATIVE 岡山店 TEL(0790)62-3411
CREATIVE 山崎店 TEL(0790)62-3411

for happy day happy life



◆最新型カラー現像機導入◆
カラープリント・スピード仕上げ
良い品を・安く・安心して買える店

コーエーカメラ

Specialty Camera Shop

本 店 TEL(0790)62-2089
穴栗郡山崎町東鹿沢26-3 咲ランド店 TEL(0790)63-0533

料理旅館・割烹

創業 菊 水
文久元年

兵庫県宍粟郡山崎町山崎287
TEL (0790) 62-1119(代)

寿

幸せへの旅立ちに——。

ふじむら貸衣裳

本 店 TEL(0790) 62-0052
穴栗郡山崎町山崎181 咲ランド店 TEL(0790) 63-0565

くらしのメッセージいろいろ……

- 大切な年金、給与振込は **にしん** の自動受取で **あんしん**
- 素敵な暮らしのお手伝い **にしん** 個人ローンでお気軽にどうぞ

豊かな街づくりをお手伝いする



西兵庫信用金庫

TEL 0790-62-2020 (代)

本醸造 **龍神** **しほりたて** **ふるさとのお酒** **山陽盃** **清酒** **確かな品質** **純米酒** **まつき** **献き**

サンヨウハイ

山陽盃酒造(株) TEL (0790) 62-1010(代)

しほりたて
原酒



キリンビール
特約店

本醸造

兵庫県山崎町 老松酒造有限公司

※ 安全で快適な生活をお届けする ※

JOMO 株式会社 ジャパンエナジー 特約店

ホンジヨウ

本社 兵庫県宍粟郡山崎町中井96 TEL (0790) 63-1234 (代)
(0790) 62-4321 (代)